

日本家政学会
被服構成学部会誌

第30号

30周年記念特集

平成21年3月

目 次

・ごあいさつ	1
・平成 20 年度 被服構成学部会 総会	3
・平成 20 年度 被服構成学部会 夏期セミナー	
プログラム	4
基調講演 1「グローバル視点から見たアパレル企業動向」	5
基調講演 2「かたち・動き・変形を再現するデジタルヒューマンモデル」	6
パネルディスカッション「アパレルの現場のサイズとデザイン」	
「バストの分布形に見られる年齢による体型変化」	7
「アパレル現場のサイズとデザイン」	7
「ユニクロの商品に対する姿勢」	8
「既製衣料サイズの今後」	8
産業技術総合研究所 デジタルヒューマン研究センター見学に参加して	9
夏期セミナーに参加して	9
・第 21 回国際家政学会議(IFHE100 周年記念スイス大会)に参加して	10
・平成 20 年度 文部科学省 科学研究費補助金による公開講座	
「生活の質を高める衣服－健康で自立した高齢期を過ごすために－」	11
・海外研修体験記 イギリス ラフバラ大学	12
・関連学会短信	
日本衣服学会	14
日本人間工学会－第 49 回大会－	14
2008 年 ITAA 年次大会	15
・平成 20 年度 修士論文テーマ・要旨	16
・会務報告	17
・平成 19 年度 被服構成学部会 夏期セミナー収支報告	18
・平成 19 年度 被服構成学部会 収支決算報告	19
・平成 20 年度 被服構成学部会 予算	20
・お知らせ	21
・ご案内	22
＜被服構成学部会 30 周年記念特集＞	
・被服構成学部会活動の 30 年	25
・歴代部会長・副部会長一覧	26
・元部会長・副部会長からのメッセージ	27
・被服構成学の教育・研究の動向	30

・ 国際交流	
被服構成学部会企画の海外研修	44
ITAA, 韓国衣類学会, IFHE, ARAHE	45
・ 社会との連携	
ものづくり研究公開講座	46
「全国中学生創造ものづくり教育フェア」への後援・協賛	47
研究公開講座	48
・ 被服構成学部会に期待すること	49
＜被服構成部会会則 その他＞	
・ 被服構成学部会 会則	54
・ 平成 20・21 年度役員	56
・ 入会申込書	57

ご あ い さ つ

(社) 日本家政学会 被服構成学部会
部会長 泉 加代子 (京都女子大学)

昨年秋のリーマンショック以来、100年に一度の世界恐慌と騒がれていますが、部会員の皆様の勤務校の卒業生に影響は及ばなかったでしょうか。少子化に加えてこの不景気が追い打ちをかけ、私学の受験生・新入生確保に厳しい状況を作ったのではないかと心を痛めております。

部会長という大役をお引き受けして1年が過ぎました。運営委員はじめ部会員の皆様のご支援とご協力を得て平成20年度の部会の事業を計画通り進めることが出来たこととお礼申し上げます。

昨年は部会発足30周年を迎え、8月の総会では前部会長の猪又美栄子先生と前副部会長の雲田直子先生にお願いして部会活動の30年を振り返る企画を行いました。また、両先生には30周年記念特集号の立案もお願いし、ここに部会誌第30号を30周年記念特集号との合併号としてお届けすることができました。お忙しい中、原稿をお寄せくださいました先生方に深謝申し上げますとともに、部会誌を編集してくださった先生方に心より感謝申し上げます。

平成21年度の部会活動計画をお知らせします。8月開催の総会と夏期セミナーは、福井県あわら温泉の老舗旅館で開催します。「社会的ニーズに対応したアパレルの開発動向」をテーマに、服部由美子実行委員長を中心に準備を進めてくださっています。福井県のテキスタイル・アパレル企業の見学も予定されています。昨年の夏期セミナーで、産業技術総合研究所の持丸正明氏から被服構成学の現状を親身になって心配していただきました。部会員が同じ宿に泊まって、温泉で疲れを取り、今後の被服構成学や部会のあり方についてじっくりと語り合いたいと思います。多くの部会員の皆様の参加をお待ちしています。

3月の公開講座の件ですが、昨年度総会において、平成21年度事業計画として、科研費補助金研究成果公開促進費を申請して、新たなテーマで公開講座を開催する予定と報告しましたが、準備不足と平成21年度から研究成果公開促進費の重複申請が禁止となり、家政学会から1件しか申請できなくなったことを理由に科研費の申請を断念しました。お詫び申し上げます。その代わりに、平成22年3月は研究例会を開催し、次年度公開講座実施に向けての準備をするために部会員が勉強する会にしたいと思います。布施谷節子先生に実行委員長をお願いし、小・中・高校の学習指導要領の改訂に対応して、部会として何ができるかを鳴海多恵子先生はじめ教育系学部在籍しておられる先生方の意見を聞きながら皆様と一緒に考えていきたいと思っています。

平成14年度から部会で取り組んできました全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援・協賛は引き続き行う予定です。

また、今年は第15回アジア地区国際家政学会議 (ARAHE) が12月にインドのムンバイで開催されます。テロの影響が懸念されますが、現在のところ予定通り開催されますので奮ってご参加ください。

暗いニュースが多い中、部会では昨年、喜び事がいくつかありました。高部啓子先生が日本家政学会賞を受賞され、大塚美智子研究室が花王(株)と共同研究・開発されたパンツ型紙おむつがグッドデザイン賞を受賞されました。公開講座の内容の一部が朝日新聞の全国版に大きく掲載されるという明るいニュースもありました。

部会員が一枚岩となって力を合わせ、被服構成学の教育と研究が今後も社会から高い評価を受けるよう頑張らしましょう。

平成 20 年度 被服構成学部会 総会並びに夏期セミナー
工業製品としての衣服
—先端研究からアパレルの現場まで—

期 日：2008 年 8 月 25 日（月）、26 日（火）

会 場：日本女子大学 新泉山館国際交流センター

〒112-8681 東京都文京区目白台 2 丁目 8 番 1 号

プログラム

8 月 25 日（月）	
12：30～	受付開始
13：00～13：05	開会の辞 部会長挨拶
13：05～14：35	基調講演 1 「グローバル視点から見たアパレル企業動向」 <div style="text-align: center;">エコテックジャパン（株） 代表取締役社長 近藤繁樹氏</div>
14：35～14：55	休憩
14：55～16：25	基調講演 2 「かたち・動き・変形を再現するデジタルヒューマンモデル」 <div style="text-align: center;">産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター 副センター長 持丸正明氏</div>
16：30～17：00	平成 20 年度総会
17：00～17：25	「30 年を振り返って」
17：45～19：30	懇親会
8 月 26 日（火）	
9：30～9：45	パネルディスカッション「アパレル現場のサイズとデザイン」 <div style="text-align: center;">コーディネーター 日本女子大 大塚美智子氏</div> パネリスト 1. 東京家政学院大 川上 梅 氏 2. (株)オンワード樫山 川島 寿子氏 3. (株)ユニクロ 小瀧裕美子氏 4. 実践女子大 高部 啓子氏
9：45～10：15	
10：15～10：45	
10：45～11：15	
11：15～11：25	休憩
11：25～12：00	討論
14：30～15：30	見学 「産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター」

＜基調講演1＞ グローバル視点から見たアパレル企業動向

エコテックジャパン株式会社
代表取締役社長 近藤 繁樹 氏

幅広い国際情報をベースに、企業としての社会的責任を果たし、消費者への安心・安全の提供を目指すための法令の遵守、認証取得へのサポートを行っている近藤氏に、アパレル企業の現状をお話しいただいた。

日本のアパレル産業は、わずか15年前までは、紡績・染色を含め製造が行われていたはずであるが、急速に縮小して輸入産業へと変貌した。現在、輸入衣料は80%を超える。輸入品は中国製が多く、また、日本製といえども中国の縫製者によるものが多い現状である。縫製の現場では、非常に早いサイクルの中で安価な商品求められ、その消費実態にあわせて、単なる工業製品とした納期重視の仕事形態で製造を行う実態があり、そこには衣料本来の品質を評価するプロも存在しない。そのため、工業製品としては直し率が非常に高いところも問題がある。

ヨーロッパでは、地域が経済活動した結果がものづくりの原点となっている。そこで、小売業が商品を消費者に安心して提供するあたっては、仕入れ段階で工場の生産体制までも調査する姿勢をもっている。地域として、学校と業界間を行き来しながら生産者・小売業としてのプロや消費者が育つ土壌がある。また、衣料品は人間生活の豊かさを反映するものとして、感性だけでなく世相を理論的に分析し、将来的に何を顧客満足とするかを追及する研究がされている。

繊維・ファッションの売り上げが全産業の約25%を占め、輸出が輸入を上回るイタリアでは、モデリスト、クラフト、フィッターのプロの連携とそれを支える工業技術がファッション産業の強さの要因となっている。生産現場では、プロフェッショナルのモデリストが何十人という商品の価値を支えている。モデリストは工場の現場をすべて把握していて、縫製ラインにも指導が出来る立場である。また、着心地を検査するプロがい



て、商品の出来栄や商品の価値をプロの人間が決める。必要であればマシンも開発する姿勢でものづくりをしている。

小売業は、国際的には安心・安全のための化学物質の規制や環境汚染、児童労働や作業環境などの法令遵守に関して生産工場をチェックし、販売物の製造元に安心と安全に関する責任を持ち、また、二酸化炭素発生に付いてもきちっと調べ、産業として貢献しようとするのが常識になっている。この点は、未だ日本は世界と肩を並べることが出来ない。

また、日本では、仕事が細分化されすぎて、モデリストや、着装して評価できるプロが育っていない。アートとクラフトマンと工業技術の融合、消費者へ納得させるしくみ、企業の品格、企業の学校への貢献など、ヨーロッパの地域社会に学び、学会、学校、業界が一本化して考えていく必要がある。日本でもアパレルで唯一輸出しているEDWINは、カイハラオリジナル生地が付加価値のついた高額なジーンズが輸出に成功しており、また、JFWなどの取り組みも事例研究に値する。

今後、衣料消費が、人口減に伴い2055年には1/3になるという日本の厳しい状況も併せてアパレル産業の国際化の意味を改めて考えさせられる講演だった。

(記録 磯崎 明美)

<基調講演 2> かたち・動き・変形を再現するデジタルヒューマンモデル

産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター

持丸 正明氏

デジタルヒューマン研究の最先端技術とその応用事例について、「人のかたちを測る・再現する」「人の動きを測る・再現する」「人の変形を測る・再現する」「体型データの持続的蓄積と活用」の4視点よりご紹介いただいた。デジタルヒューマン研究とは、人のかたち、運動、変形を計測し、そのデータに基づいて人の身体の個人差、運動の条件差、運動に伴う変形をコンピュータの上に再現し、それをものづくりに役立てる研究である。講演の概要は以下のものであった。

1. 人のかたちを測る・再現する

人の身体を3次元計測し、解剖学的特徴点に基づいて人体形状を同一点数、同一位相幾何構造のポリゴンで再構成しなおし相同モデルを汎用的に生成する相同モデリング技術が開発された。相同モデル化した人体形状の分布状態を多次元尺度法で求める。多次元尺度の各分布軸に沿って人体形状がどのように変化するかを空間の格子変形パターンとして定式化することで、分布図の任意の位置の仮想形状がコンピュータの中で合成され可視化できる。細分割曲面でポリゴンモデルを再帰的に分割して主成分分析で分布を調べることにより、コンピュータ内に様々な全身形状を再現することも可能である。応用事例として、中年女性の臀部形状の分布が婦人用パンツの設計に応用された例、ダイエット効果の分析例等が紹介された。

2. 人の動きを測る・再現する

人の動きを測るということは、関節の位置座標の時間変化を記録することである。これにはモーションキャプチャが広く利用されているが、関節位置は本来生体内部にあるので、体表面のマーカ位置をそのままデジタルマネキン（コンピュータ内の仮想人体）に利用すると、機能寸法の再現精度が悪いという問題点があ

った。これを解決するために、生体内関節中心を推定する技術が開発された。このような技術を用いて、環境条件により変化する人の動きを精度よくコンピュータ内で生成する方法論が提案されている。応用事例として、フロア高とルーフ高に応じて生成された、デジタルマネキンの自動車乗降動作が紹介された。

3. 人の変形を測る・再現する

運動中の人体形状を計測できれば、皮膚変形に対応した着用品の設計が可能となる。人体形状計測システムを用いて、2つの方法により同一被験者の異なる姿勢での体形を計測し、そこから変形を定式化する研究がすすめられている。第1はモーションキャプチャ技術に基づくもので、全身に400点ものマーカをつけて皮膚表面の変形を直接計測し、事前に立位姿勢で計測した数百万点の全身体形データの変形に利用する方法。第2は最新のコンピュータビジョン技術を用いて、歩行・走行中の足部変形を4次元計測するものである。前者はスポーツウェアの設計に後者はランニングシューズの設計に利用される。

4. 体型データの持続的蓄積と活用

近年、簡便かつ安価な計測器が普及し、研究室レベルの計測から、店舗で顧客の体形を計測して適合製品を推奨するというビジネスが具現化しつつある。健康増進サービスともの作りとの連携もすすむなど、世界中の数百万のデータを小売サービスを通じて蓄積できる時代になってきた。世界規模で持続できる人間特性データベースの開発が可能で、海外の研究者と協力しながらその互換性、信頼性、活用性が検討されている。

(記録 土肥麻佐子)

パネルディスカッション「アパレルの現場のサイズとデザイン」

バストの分布形に見られる年齢による体型変化

—ブランドの基本身体寸法と

身体計測データとの比較の試み—

東京家政学院大学 川上 梅

1. バストの分布に関する検討

20-24 歳の分布は、『皮下組織を表す項目は右に裾を引く分布形を示し、最頻値は平均値よりも若干小さい値になる』という、教科書通りの単純な形を呈している。45-49 歳までは、基本的にはこの分布形である。

しかし、50-54 歳では二山、75-79 歳では三山の分布形を示すようになる。二山分布は基本的には、50-54 歳以降 70-74 歳まで続く。年齢と共に個人差が大きくなることは従来から指摘されてきたことではあるが、単に分布形の山が低く、裾が広がるだけではない。分布形の違いから体型を、20-24 歳から 45-49 歳までを第Ⅰ期、50-54 歳から 70-74 歳までを第Ⅱ期、75-79 歳以上を第Ⅲ期と区分することができる。

2. ブランド別の設定寸法と実際の着用者のサイズ

ブランドの表示サイズと基本身体寸法（バスト、身長、ヒップ、ウエスト）を事例的に調査し、これとブランドが対象とする年齢集団の身体計測データとの比較を行った。この結果、例えば、25-34 歳をターゲットとするブランドではウエスト、ヒップを実際よりも細く、女性の身体理想像に近いイメージの基本身体寸法を設定している傾向が伺えた。また、「大きいサイズ」と呼ばれる 55-64 歳をターゲットとするブランドの 15 号では、ヒップや身長が実際よりも大きく設定される傾向がみられ、一方、「小さいサイズ」と呼ばれる 35-39 歳、40-44 歳をターゲットとするブランドの 5 号ではウエストを実際よりも小さく設定する傾向がみられた。上記のような体型の実情とアパレルのサイズ展開について研究結果を報告した後で、アパレルの企画設計では体型要因以外にどのようなことを考えているのかを知りたいとして、「アパレル現場のサイズとデザイン」のテーマに対する問題提起を行った。

(文責 川上 梅)

アパレル現場のサイズとデザイン

—体型をどのように見ながら

パターンを作成しているか—

元 株式会社オンワード樫山 技術開発部

川島 寿子 氏

アパレルの現場で長い間活躍されてきた川島氏から、以下の 5 点を中心にご講演をいただいた。

①ブランドとサイズ：新しいブランドを立ち上げる時、また既存のブランドの見直しをするとき、一番重要になるのは、どの年齢層に向けた商品なのかということである。ターゲットの年齢に合わせて、若者ブランドはシルエットを重視、加齢対象ブランドは機能性を重視する。②体型：反身体、屈身体によって、寸法が違う部分を意識してパターンを作成する。③構造(体型)を知る方法：的場しのぶ先生の紙貼り技術を用いてボディの型を取り、立体形状になっているものを平面に展開した。これにより、身体の構造が正確に把握できるようになった。④大きいサイズとデザイン：普通のサイズから大きいサイズにしていくには、考慮すべき点がいくつかある。若者ブランドでは、大きいサイズでも均整がとれているので、通常のグレーディング処理などで対応できる範囲である。しかし、加齢ブランドでは、脂肪の付き方に特徴があり、特に厚み方向に大きくなる傾向があることから、グレーディングでは対応できない。また、細く見えるデザインにするために縦横の比率を考慮するなどの工夫を要す。⑤ボディ開発：パンツを作成するにあたっては、股ぐりの部分の形状把握が難しい。そこで、パンツ用ヌードボディを文化服装形態機能研究所と共同開発した。これにより、「美脚パンツ」と命名できる商品の開発を行うことができた。

よりよいパターンを作成するためには、人体の形状把握が重要となる。近年 3D 計測が容易になり、また精度も高くなった。その膨大なデータのどの部分を使用してパターンを作成するのかという点が、今後の重要な要素となる。

(記録 山本高美)

ユニクロの商品に対する姿勢

株式会社ユニクロ 生産技術部
小瀧 裕美子氏

ユニクロは日本国内のSPAの草分けとして知られており、国内のみならずUSA、UKをはじめ海外へも進出している。小瀧氏は生産技術部に所属し、サイズ展開の問題を含めて製品の品質・安全管理への取り組みについてお話をしていただいた。

ユニクロの品質・安全管理チームでは、企画商品の品質データの確認、商品の機能性・安全性についての確認、品質基準の管理・国内外販売分の法規制の情報収集、さらには商品の品質に関するお客様からのお問い合わせ・苦情などに対応、お客様からのお申し出商品や店舗から戻ってきた商品や品質に関する問題点などを生産管理部門へのフィードバックを行っている。グローバル企業であるため、各国の法規などの情報の収集と配慮は必要不可欠である。また、年間2000件といわれる苦情や問い合わせをとりまとめ川上から川下まで情報を共有することで、消費者のニーズに応えるとともに隠れたニーズに応えることや新しい機能や価値の提案につながっている。

サイズ展開については、JISサイズ規格は基本に考えながらもオリジナルのサイズ展開を行っている。たとえば、ユニクロのキッズサイズは、95、100・・・160となっていて、内容はJISに準じているがベビーやメンズと重複するサイズは省略している。ウイメンズの範囲表示はXSからXLまでの5つのサイズ展開で、バストの小さいサイズは身長も低く、バストの大きい方が身長も高いというシステムになっている。単数表示については、ウイメンズのウエストで55、58・・・76、80、・・・109の16サイズである。これには大量生産の生産効率の面から取り扱いサイズは少なくする、海外でも通じるサイズ表記にするという意図がある。大きいサイズや小さいサイズも無視しないで提供しようとする企業の現実が垣間見られた。

(記録 渡邊敬子)

既製衣料サイズの今後

実践女子大学
高部 啓子氏

日本で実施されてきた体格調査の初回から携わられた高部啓子先生より、日本の既製衣料をより良くするために、現行衣料サイズの問題点の提起などをしていただいた。全国規模で実施される体格調査は、1960年代から現在まで4回行われた。当初は手計測（直接計測）のみであったが第3回目より三次元計測が導入され、計測手法の進歩は認められるが、同一計測項目に対する計測定義が異なる場合があり、データ間の比較を行う際には注意が必要である。人体計測データに基づく公的な既製衣料サイズは、1970年に「JIS L 0102 既製衣料呼びサイズ」として初めて制定された。これにより、既製衣料サイズを身体寸法で表すことが定着した。その後、国際規格と整合性をもつように既製衣料サイズ関連規格の全面的な見直し検討がなされ、1980年に現行の既製衣料サイズの前形（JIS L 0103、JIS L 4001～4006）が制定され、更に、体格調査データに基づく改正と3年に1度の見直しがなされている。

以上のように既製衣料サイズは改善され続けてきたが、現行に対する今後の課題は多い。それらをまとめると、①服種による分類の再考（着用者間の整合性、ISOとの整合性等）、②サイズの配置、ピッチの再考（ISO-TRでは成人女子のバストは4cmピッチ、乳幼児・少年・少女の身長は6cmピッチ等）、③記号の意味に関するサイズ規格間の整合性（B体型、S、L、M等）、④各サイズに対応する身体各部位寸法と形態的特徴をどのように示すか（ターゲットとなる年齢別表示等）、⑤定期的身体寸法データの把握・改定の必要性、⑥既製衣料サイズの広報・教育の必要性、である。

高部先生はご自身のご研究の結果や緻密なデータ分析結果を示されながら、既製衣料サイズの今までと今後について詳細にお話し下さり、私たち部会員がそれぞれの立場から果すべき役割の大きさを痛感した。

(記録 植竹桃子)

産業技術総合研究所 デジタルヒューマン研究センター
見学に参加して

埼玉大学 川端 博子

両日ともあいにくの天気となった夏期セミナーであった。2日目午前のプログラムを終え、日本女子大を後にし、見学先の産業技術総合研究所に向かった。貸切バスに揺られて80分間、参加者同士が交流し、街並みを楽しみながらバス遠足の気分を味わえたのではなかろうか。

前日に力強くご講演下さった持丸正明先生より、研究施設の案内・開発品の説明を頂いた。主だった内容について以下に記載する。①頭部形状の3次元計測データに基づくフィットするめがねフレームの設計とCGによる好みのフレームを探しあてる装置、②足を入れるだけで簡単に3次元データが得られる足形状スキャナ、③手部の3次元計測値をもとに設計されたデザイン性・機能性に優れたバッティング用手袋とコンピュータ用マウス、④全身用3次元計測装置と骨格点の対応を示すマーカー付けの工夫、食い込みのない計測用下着、⑤運動中の足部変形挙動と足裏形状を把握する4次元計測などである。いずれも人体計測を基盤とし、各種のものづくりに活かされている。後半、子どもの事故予防に関する取り組みについて、公園の遊具から衣服に至るまで幅広い内容を、安全に関する考え方と共に示して頂いた。

研究所ではオープンスペースを区切って実験が行われ、互いの研究を身近に見ることでコミュニケーションが図られ、新しいアイデアに結びつくこともあるという。厳しい状況となってきた情報収集に関しても、積極的に新しい考え方を示して頂いた。高額な装置の数々は羨ましい限りだが、大学のマンパワーを積極的に活かし、相互に知恵を出し協力しあうことの必要性を感じた。また、衣服においても安全面からなすべき課題が多々あることを再認識させられた。2回にわたり元氣と刺激を下された持丸先生と事前準備をして下さった土肥麻佐子先生に感謝致します。

夏期セミナーに参加して

東北女子大学家政学部
葛西 美樹

「工業製品としての衣服—先端研究からアパレルの現場まで—」というテーマに惹かれ、初めて構成学部会夏期セミナーに参加させて頂きました。近藤先生の迫力ある基調講演では、日本のアパレルの現状について最新のデータを交えながら、まさしくグローバル視点から聞かせて頂きました。ヨーロッパでは安全に生活するため幼少時より家庭・学校・地域社会が連携して、消費者教育に取り組んでいるとのことでした。改めて「安ければ良いのか」「環境への配慮は」などたくさんの課題を投げかけられたように思います。持丸先生は2日間にわたり最先端の技術・研究事例を多数ご紹介下さいました。デジタルヒューマン研究センターの見学会はあっという間に時間が過ぎ、中でも子供の事故予防研究(パーカーの引き紐による危険性など)は興味深いお話でした。また、数年前に足部の4次元変形計測についての講演をお聴きしましたが、今回実際に、その計測している場所で説明して頂き、より理解を深めることができました。長い距離で計測すると想像していましたが、実際は10メートルにも満たない場所で、少し驚きました。二日目のパネルディスカッションでは、あらゆる年代・体型の人を満足させるためブランド数を多く持つオンワード樫山と、生産効率のためサイズ展開を極力少なくし低価格で提供するユニクロは対照的で、両社のサイズに対する捉え方の違いがよくわかりました。高部先生が「消費者が正しくサイズを認知するため、学校教育だけではなく売り場でのサイズ呈示が消費者を育てる」と話されていましたが、初日の近藤先生の講演からも、快適に、安全に衣生活を送るためにはコミュニティとの関連も今後重要になると感じました。部会創立30周年の節目の年に、全日程参加させて頂き、これまでの活動を知ることでもできました。充実した二日間となりましたこと、御礼申し上げます。

第 21 回国際家政学会議(IFHE100 周年記念スイス大会)に参加して

京都女子大学 泉 加代子

第 21 回国際家政学会議が、2008 年 7 月 26 日～31 日にスイスの古都ルツェルンで開催された。私が海外で開催された IFHE に参加したのは第 16 回ミネアポリス大会 (1988) と第 17 回ハノーバー大会 (1992) について 3 回目であるが、過去 2 回の大会同様、今回も日本からの参加者は非常に多く、参加者名簿には 183 名と記載されている。過去の 2 大会との大きな違いは、日本からの発表件数が著しく増加したことである。口頭発表 19 件、ポスター発表 77 件、実践展示 17 件、作品展示 2 件の合計 115 件あり、第 20 回京都大会での発表経験が今回の発表件数の増加に繋がったと思われる。詳しい報告は日本家政学会誌 Vol. 59, No. 12 に記載されているので、以下に被服関係に的を絞って記す。

被服学関連分野の発表は、口頭発表 11 件 (日本 1 件)、ポスター発表 20 件 (日本 15 件)、実践展示 7 件 (日本 4 件) で他の分野に比べるとかなり少ない。しかし、ハノーバー大会の報告書の中で、松山容子先生が「発表申込みはしたが、プログラムを見て果たして行ったものかと迷った」と記しておられたように、被服領域は口頭発表 4 件、ポスター発表 6 件の合計 10 件しかなかったのと比べるとかなり進歩したといえる。

構成学部会員の発表は、口頭発表が “Three dimensional body measurements and cad pattern making” の 1 件、ポスター発表は、“The female students’ attitudes toward the ecology on clothes” と “Support system of universal 3d-fashion select and order using web page in ubiquitous net society of Japan. Part 1:3d-body shape type information for well-fitted garment. Part 2:well-suited garment design information using 3d-garment simulation” の 3 件、実践展示は、“Research and making of ‘kamiko’ from paper fabric” と “Fashion therapy for those in need of

care” の 2 件である。

また、本大会からテキスタイルの作品展示部門が設けられ 9 件の展示があった。日本からの 2 件は部会員の “Non-sewing drapery” と “Japanese Summer Festival” で、日本らしい作品は注目を浴びていた。

Textiles and Housing の見学会は、(1) 織物工場とデザイン企画室、(2) 毛の繊維の原料となる動物を飼育している牧場、(3) 高級家具・インテリア工場の 3 コースに分かれ、それぞれ 1 箇所を半日かけて懇切丁寧な説明を受けたが、希望するコースを選択できればよかったのにとの声もあった。

最後のバンケットは民族衣装で参加するようとの案内があったようで、日本からの参加者の和服姿が目を引きいていた。単の長着を涼しげに着こなしておられる先生方も多くおられたが、中には袷の長着や浴衣姿もみられ、和服の規範が崩壊していることを嘆いておられる先生もおられた。

学会終了後、被服構成学関連の見学を中心とした東欧 3 カ国研修旅行に参加した。参加者 11 名のうち部会員は 4 名であったが、10 名が被服出身者で和氣藹々とした楽しい研修であった。スイスでは気温は 32℃まで上昇し、会場の多くとホテルは冷房がなく、野菜もなく、物価が高くて耐乏生活をしてしたが、一転して東欧 3 カ国では冷房付きの大きな部屋の一流ホテル、各国の伝統料理、生演奏付きのディナーなどを堪能したリッチな 6 日間であった。プラハのチェコ・ファッションセンターや美術工芸博物館、ウィーンのシェーンブルン宮殿や王宮、民族衣装やプチポワンの店、ブダペストのハンガリー民族博物館などの見学は、それぞれの国の伝統衣裳や衣文化に十分浸ることができたが、この研修での一番の収穫はカロチャ刺繍工房の見学であった。布の宝石といわれる色彩の鮮やかさと精巧な技術に魅了され、購入したカロチャ刺繍のブラウスとベストは我が家の訪問客を感嘆させている。

平成 20 年度 文部科学省 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）
「研究成果公开发表（B）」による公開講座

生活の質を高める衣服 — 健康で自立した高齢期を過ごすために —

実行委員長 森 由紀（甲南女子大学）

本年度の公開講座は、文部科学省科学研究費補助金の交付を受けて、右のとおり行われます。昨年度の公開講座では、実行委員長 布施谷先生はじめ諸先生方のご尽力で、障害をもつ方々の生の声を聞かせていただくという得がたい機会をいただきました。

引き続き、日頃の部会員の研究・教育の成果を活かし、一般の方々に衣の魅力について発信できる場となります。今回は、昨年度の内容を踏襲しながら、特に高齢期の衣に焦点を当てました。京都府および京都市教育委員会の後援をお受けすることができましたのは、泉部会長のご配慮によるところです。実行委員長としての責任の重さを改めて痛感しておりますと同時に、ご多忙にもかかわらず、講師および実行委員を快くお引き受け下さいました先生方に、心より感謝申し上げます。

基調講演は、元部会長の木岡先生にお願いいたしました。部会設立 30 周年の記念すべき節目の年に、部会員へのメッセージとともに、生き方への示唆をいただけることと思います。シンポジウムでは、高齢社会に果たす衣の役割について、体型適合性、動作性、素材および着用者のこころという視点から、それぞれご講演、議論いただきます。ワークショップでは、実際に見て触れて納得していただき、ポスター発表は、幅広い部会の活動を伝えるものとなることでしょう。

一般参加の方々と部会員が、互いの情報や要望を交換し合い、それぞれの立場に役立つヒントを少しでもつかんでいただけましたら幸いです。盛会となりますよう、どうぞよろしくお願いたします。

プログラム

日 時：平成 21 年 3 月 21 日（土）

会 場：キャンパスプラザ京都 5F

10:00 開会の挨拶 部会長 泉加代子

10:10～11:40 シンポジウム

「超高齢社会に衣服はどう貢献するのか」

コーディネーター 和洋女子大 布施谷節子

①「体型を配慮した衣服 — 快適性向上のための
体型フィットデザイン —」

日本女子大 大塚美智子

②「運動機能に適応した衣服 — 形や着方による
動きやすさの違い —」 昭和女子大 石垣理子

③「安全・安心な衣服 — 着心地・健康と高機能
テキスタイル —」 神戸大大学院 井上真理

④「心を元気にする衣服 — ファッションセラピー
の効果 —」 京都女子大 泉加代子

11:40～13:10 昼食ならびにポスター発表

13:10～14:10 基調講演

「生活の質を高める衣服 — おしゃれに生きる —」

甲南女子大名誉教授 木岡悦子

14:20～15:20 展示とワークショップ

①「適合サイズ探し」 和洋女子大(非) 平林優子

②「衣服圧体験」 京都女子大 岡部和代

③「ユニバーサルデザイン衣服の展示と
アドバイス」 日本女子大 大塚美智子

④「生き生きシニア・ファッションショーの
ビデオ上映と解説」 京都女子大 泉加代子

15:30 閉会の挨拶 実行委員長 森 由紀

海外研修体験記

イギリス・ラフバラ大学

横浜国立大学 薩本 弥生

1. はじめに

横浜国立大学教員海外研修制度により平成 20 年 3 月 31 日よりイギリスのミッドイングランドにある Loughborough University (ラフバラ大学)において Human Sciences 学部の George Havenith 教授に師事し客員研究員として7ヶ月間、研修する機会を得た。

個人的な事情により娘2人(13歳と11歳)をつれての子連れ留学となり、短い期間で成果を上げられるか、また、娘達は地元の学校で上手くやっていたらいいかなど、心配はあったが、思い切って挑戦した。

ラフバラはレスター州に属し、北はノッティンガムやダービー、南はレスターの大都市に30分~1時間の距離でイギリスの真ん中に位置するが、自然にあふれ、子供と過ごすにはとても良い町だった。

2. 日常生活

イギリスでは13歳くらいまでの子供は子供だけの通学はタブーで、学校の送迎のために中古車を購入して車で朝、学校ま



で送り出してから出勤、授業が終わる3時頃に研究室を抜け出して迎えに行った。

自宅は大学の近くで比較的安全な地域の住宅街の家を借りた。上写真のセミダッチ(二軒長屋の戸建て)で広くて良かったが家具を購入しなくてはならず、イギリスの物価高と相まって少々割高だった。しかし、子供のために利便性と安全性を重視した。イギリス人は街並みが自然とマッチするのを好むので住宅街の建物の外装はどこも古い煉瓦で出来ており街並みが自然ととけあって風景がとても綺麗だった。手を入れながら長く使うので、少々老朽化していたが、総じて住み心地は悪くなかった。

3. インターナショナルデー

ラフバラの日本人会からの紹介で4月下旬にラフバラ大学において留学生主催で年に一度開催されるインターナショナルデーに娘と一緒に参加しお手伝いした。

折り紙の実演やミニおにぎり、桜や抹茶のクッキーやカップケーキの試食品を配付した。書道で名前を書い



てプレゼントし箸での小豆すくいコーナーも設けた。書道コーナーは珍しいのか、行列が出来る人気だった。学生の皆さんの事前の万全の準備のおかげで当日は成功裏に終り楽しく興味深い体験が出来た。



私たちは娘たち共々ゆかたを着て日本をアピールした。ゆかたは人目をひき記念撮影を何度も頼まれ日本の伝統文化としての着物文化を気軽に演出できるゆかたのありがたみを感じた。

ラフバラ大学は留学生が多く当日の出店も46カ国からの出店があったそうで、どの国も限られたスペースに工夫を凝らしてその国の特徴を宣伝していた。中国は北京オリンピックの宣伝をしていた。

P.S. 後日、下の娘は小学校で日本の着物が話題になり練習したての浴衣の着つけをみんなの前で披露した。ひもで何度も結ぶのが funny と言われたが好評だった。



バーレーン



中国



クウェート

4. 地元の中学校での clothing の授業内容紹介

イギリスの家庭科の内容を日本のそれと比べたいと思い、上の娘が通学する中学校の事務に相談し家庭科 (clothing) の先生との面談の機会を得た。

日本と違い大きく cooking, clothing, art が1つのグループで、2時間続きの授業を週に1, 2回、半期ずつ交代で教える。被服では20年位前までは着る物を作らせていたが最近布に加工を加えた小物を製作させる(写真A, B, C参照)。縫製技能面より art と同じクリエイティブな作品づくりに走っているようだった。



A: 絞り染め B: ろうけつ染め C: タピストリー

家でも作るか聞いたところ、最近は親世代も家庭で技術的なことを教える技量が伝承されておらず家ではあまり作らないとのこと。日本と事情は同じようだ。男女共習も30年位前から始まったらしい。

日本の衣生活教育とは異なり、UKでは clothing は art の一部で感性を生かした職種に将来就くための職業訓練の基礎学習の位置づけという実感だった。

5. ラフバラ大学

ラフバラ大学はイギリスの大学ランキング13番目で特にスポーツが盛んでオリンピック選手を沢山輩出している様子。設備が充実していてスポーツを科学的に支える研究も盛んとのこと、学生の満足度のアンケートでは今年度イギリスで1番になったらしい。

<健康・快適性に関わる研究および被服関連の研究>

ラフバラ大学の中で人間の健康・快適性に関わる研究拠点の1つは私が所属した Human Science 学部であった。振動、温熱等の環境人間工学、健康と安全、スポーツ人間工学等を研究していた。心理人間工学コースもあり運転や障害、加齢、睡眠、食事と運動と健康の関連等が主に自然科学的に研究されていた。

Design & Technology 学部では日本における被服教育に近い位置づけから発展した学科であるが携帯電話や家具などインダストリアルデザインをすることが中心となっており、art を支える技術を主に学んでいた。

ただ、Teacher Training の修士課程のみのコースがあり現場の教員の Action research の手法による授業の改善に関する研究が行われていた。

<所属研究室の研究体制>

私が所属した研究室は、今年度、教授1名、技官1名、博士課程の大学院生5~6名で、外国からの客員研究者は数ヶ月で1~2名が出入りしていた。

右は日本に戻る前日にお別れのランチ会をアレンジしてくれた際の写真である。



左端が私、その後ろが Havenith 教授、その他は技官、博士課程の学生や海外からの客員研究者である。

<私の研究テーマ>

私はこれまで着衣の伝熱に着衣の構成要因が影響する要因について研究を続けてきた。今回、研究したテーマは「着衣のふいご作用による換気への着衣の構成要因の効果」である。ふいご作用による換気は、人体からの熱水分移動性を促進させるため、蒸れやすい着衣の温熱快適性向上に重要である。本研究では、トレーサガス法を用いて着衣の換気量の分布を評価する方法を確立し、これを用いて温熱的に快適な着衣のデザインを検討する評価法を構築することを目指し、計測法を学び、さらに着衣の局所の計測に応用する方法について検討した。この研究は学術的な研究の成果が着衣の商品開発にも応用できる可能性が高く、実用に耐えうる評価法になると考えられ、産業界への貢献も期待され、その意味からも意義があると考えている。

6. 最後に

振り返ってみると、小さな失敗は数限りなくあるが、得難い経験をたくさんさせていただいたと思う。特に女性研究者は職場の事情に加え、家庭の事情等で留学に踏み切れない方が多いと思うが、是非、機会を見つけて挑戦してみたい。以上、個人的な体験ではあるが、印象に残ったことを書きつづった。これから留学経験をする方の参考になれば、幸いである。

関連学会短信

＜日本衣服学会＞

神戸女子大学 十一 玲子

日本衣服学会では、学会創立 60 周年記念大会、第 60 回（平成 20 年度）総会並びに研究発表会が 10 月 25～26 日の 2 日間、京都テルサに於いて開催されました。

特別講演では、京都国立博物館名誉館員 切畑 健氏による「和様美の基本思想—『源氏物語』帚木にうかがう—」と題する講演がありました。昨今「和（和様・和様美）」について関心が深まっていますが、これらについて美の基本思想を具体的に語られました。唐様から和様美の世界について、基本となる事柄を例に挙げながら沢山のスライドを用いての絶妙な講演でした。源氏物語の世界を通して、美の極限にあらためて触れることが出来た素晴らしい内容で、出席者（約 70 名余り）は、その美しさに魅了され引込まれました。

午後の記念式典では、参加されていた名誉会員の先生方から一言ずつ、お言葉をいただきました。先生方の学問への執念、学会への強い思いをあらためて確認いたしました。

シンポジウムでは、「かがやく生活—豊かさを紡ぐ衣服」として、パネラーの 4 人の先生方にこれまでの研究成果をご紹介いただき、衣服がいかにかに大切な働きをしているかを再確認し、衣服の“力”を豊かな生活につなげていくための議論を展開し、現在における豊かな衣生活について考えました。

2 日目は、総会と研究発表 17 件が行われました。被服教育に関するもの、障害者に関するもの、消費者意識に関するものなどであり、活発な質疑が交わされました。

今回 60 周年という記念大会が、学会発祥の地である京都を会場に開催され、多くの方々に参加いただきました。また会員相互の交流が図られ、新しいスタートになったように思いました。

＜日本人間工学会＞—第 49 回大会—

金城学院大学 片瀬 眞由美

第 49 回大会は、平成 20 年 6 月 14 日（土）、15 日（日）に共立女子大学の一ツ橋キャンパス本館ならびに共立講堂で開催され、同時に第 11 回日韓シンポジウムも併催された。一般講演 170 演題、シンポジウム企画 7 題の規模である。また、若手研究者として著名であり、テレビの司会などでも活躍中の脳科学者・茂木健一郎氏による特別講演「人間の多様性と普遍性」、引き続いて学会初の試みである、学会主催の公開シンポジウム「あなたの身近な人間工学」が開催された。ともに一般市民も参加可能な形式であり、広い共立講堂を学会参加者と一般市民で埋め尽くすほどの熱気、盛況ぶりであった。研究発表では、衣服の分野の一般講演が 3 題行われ、その後、同会場でシンポジウム VI「衣生活の現在・過去・未来」が行われた。このシンポジウムは衣生活を 3 つの時代に分けて見つけ直すという視点に立ち、「戦後から 1998 年まで」と題して「過去」を磯崎明美先生が、「衣生活の現在」と題して「現在」を別府美雪先生が、「10 年後の衣生活」と題して「未来」を土肥麻佐子先生が、それぞれ講演された。人間工学という人を支える複合領域の中で、衣生活をこのような幅広い視点で捉えて論じるシンポジウムの開催。さらに、気鋭の若手としてご活躍中の 3 名の先生方からお話いただく機会はとても貴重であり、各先生のご専門に基づいた視点での解説によって、多くの示唆を受けることができた。また、特別展示として（財）日本ユニフォームセンターによる会場が設けられ、最新のユニフォームの展示と、「新時代アクティブユニフォームショー」のビデオ上映などが行われた。今回の大会で印象に残ったのは、やはりシンポジウム「衣生活の現在・過去・未来」である。歴史的な一連の流れを改めて見つけ直すことを通じ、現在置かれている日本人の衣生活の状況。なかでも、今後、被服構成学の果たすべき役割、未来の衣生活を教育の立場から支えていく我々の使命を改めて考えさせられる機会となった。

<2008年 ITAA 年次大会>

東京田中短期大学 小田巻 淑子

2008年 ITAA 年次大会は、11月5日から11月9日までシカゴ郊外の Schaumburg にある Hyatt Regency Woodfield ホテルにおいて開催されました。折しもオバマ大統領候補が、シカゴで勝利演説した数時間後で、街中は落ち着いた様子でしたが、TVや新聞報道からは変革にかける人々の期待が強く感じられました。

大会初日 Keynote Speaker のシカゴ文化事業局の Melissa Gamble 氏からは、シカゴのファッション産業に対する取り組みが紹介されました。私は、これまでシカゴが、ニューヨーク、ロサンゼルスに次ぐ米国屈指のファッション産業の中心地であることを知りませんでした。今年は特に市長の肝いり(The Mayor's Fashion Council Chicago)で、10月にファッションショーや企業支援セミナーなど大々的なファッションウィークが開催された事が報告されました。地元シカゴのデザイナー、デザインスクール、ファッション産業、メーシー百貨店など多くの企業協賛を背景に、世界を目指した官民一体の産業育成の姿勢には圧倒されました。更に驚いたのは、それにトヨタが大きく貢献している事でした。イベントパンフレットの表紙には市長のメッセージがあり、裏表紙一面には「日本の伝統と創造力を基に practical, elegant で環境に配慮した革新的な未来を目指すトヨタは、本物を目指す Fashion Focus Chicago 2008 に協力する」と書かれており、日本人として大変誇りに思いました。また、今大会では、Green(環境保護)に関するテーマが大きく取り上げられ、当初 green sewing や green retailing など耳慣れない表現に戸惑いましたが、日本のエコの事でした。消費大国米国が、これまでの姿勢を変えて積極的に環境問題に配慮し始めた事は印象的でした。

研究発表の一つに「Sew Green Manufacturing Exercise」があり、簡単なバッグを題材に faculty と学生の2グループによる徹底した Industrial Sewing Technique による製作実験の試みは、興味深く参考になりました。また、日本と同じく、高齢化が進む米国で、ベビーブーマー世

代の消費動向の研究発表や高齢者の体型研究などが目立ちました。

オプションツアーは先に述べた Fashion Focus Chicago 2008 の協賛イベントの一つ、シカゴ歴史博物館の「CHIC CHICAGO: COUCURE TREASURES FROM THE CHICAGO HISTORY MUSEAM」に参加しました。自動車産業などで繁栄したシカゴの上流階級が着用したオートクチュールの作品群は、シック・シカゴの名にふさわしく、1887年から1996年までのパリオートクチュールの歴史が再現されていました。これは2009年7月26日まで開催予定となっています。

また、幸運にも今回も accept された Design Exhibition は、斬新なデザインやテクニックを追求するアート作品部門と、商品化を目指す作品部門に分かれており、例年と同様、それぞれ展示とライブショーが行われました。明確なコンセプトのもと、創造性を追求するあたりが、合理的なアメリカらしいという印象を強くしました。

ポスター展示では、デザイン指導をテーマにした発表があり、学生の描いたデザインノートなども展示されており、オリジナルアイデアを導くために徹底したディテールデザインを重ねている事が印象的でした。年配の教官が、そのノートをめくりながら、この学生はデザインも製作も抜群で、両方できる学生は少ないという言葉に、思わず共感を覚えました。こうした地味な指導が、独創的な既製服を生み出す原動力となっているのかもしれないと感じました。

今大会は昨年にもまして若い世代、特にアジアの国々出身の参加者が増え、ITAA にもグローバル化の波を感じ、ぜひ、日本の若い研究者の参加が増えて欲しいと思いました。参考までに、2009年度の大会は10月28日から31日まで、シアトルで開催される予定です。東海岸ですから日本からは比較的近く、参加しやすいと思います。

平成 20 年度 修士論文テーマ・要旨

衣服設計のための

幼児の成長に関する縦断的研究

：体型の成長と衣服の着脱に関する分析

静岡大学教育学研究科 塩澤(宮石) 真希子

(指導 大村 知子)

【目的】

成長に対応した衣服設計に資するため、縦断的観察により身体寸法と体幹部形状の成長様相の個性を捉えた。他方、着脱の自立様相の追跡観察から、衣服の構成とその着脱と自立促進との関連性について検討した。

【方法】

(1) 観察資料は静岡市 F 幼稚園に在籍した満 3 歳児 30 名の 2008 年春～秋における着脱の様子をビデオ撮影し得た。解析は衣服に関する 9 項目、着脱行動 6 項目、適合性、基本属性の全 17 項目について被験者別に着脱の自立様相の解析と着脱の自立と着脱との関係などの検討を行った。

(2) 身体計測は 2006～2008 年にかけて同幼稚園児 238 名を追跡し、計測方法は日本体格調査委員会に準じて行った。解析は身長・体重・上衣に関する 6 項目の全 8 項目について個成長の検討、成長量の解析及び成長量の推定などを行った。(3) シルエットは 2008 年 4～9 月にかけて同幼稚園児 87 名を被験者として追跡し、背面・右側面を写真撮影し得た。解析は、写真計測ソフト(メディックエンジニアリング製)を用いシルエット上の角度、側面 7 項目、背面 2 項目の全 9 項目を捉え、変異の個性の検討、変異量と変異率の算出などを行った。

【結果及び考察】

(1) 着脱の自立過程には、着用枚数が少なく、衣服の前後や裏表が判別しやすすいほど自立が進んだ(2) 身体寸法の成長量の推定式の決定係数は、最大値は 3 歳春～5 歳秋間における頸付根囲の 0.73、全体の適合率は 72.0%以上であった。(3) 頸窩点から乳頭点、乳頭点から腹部最凸点の傾斜度の変異は負を示した。腹部のふくらみの減少を予測した衣服設計が求められる。

高齢女性の腰腹部形状の解析と

衣服設計への応用

実践女子大学大学院 生活科学研究科 松本 朋子

(指導 高部 啓子)

【目的】日本では高齢化が進み、現在の高齢化率は 21.5%に達している。諸外国と比べて高齢化の速度は著しく速く、約 30 年後には 35%に達すると予測されている。従って今後、高齢者向け既製服市場は急速に拡大していくと考えられる。しかし現在の既製服生産は若者中心であり、高齢者に十分対応していない。今後高齢者に魅力ある既製服を提供するためには現在の既製服生産の改善が必要である。

そこで本研究では、高齢者を対象とした裁断用ボディや衣服パターン設計に活かせるよう高齢女性の詳細な体型をとらえることを目的として若年女性との比較から腰腹部の立体形状について検討した。

【方法】2008 年 1 月～2 月と 2008 年 9 月～10 月に 64～85 歳(平均年齢 70.0 歳)の高齢女性 91 名を対象に、2008 年 7 月に 18～23 歳(平均年齢 20.3 歳)の女子大学生ボランティアによる若年女性 103 名を対象に三次元計測を実施した。

ミノルタ製非接触三次元デジタイザ vivid910、解析ソフト 3D-Rugle により体表長等 26 項目の計測および腰腹部 20 断面の座標値を測定した。これらを用いて、腰腹部の詳細な立体形状を観察し、主成分分析により立体形状を表す要因を抽出し、得られた主成分得点を用いてクラスター分析を行い腰腹部形状の類型化を試みた。さらに形状の特徴より高齢女性の衣服設計への応用を考察した。

【結論】高齢女性の腰腹部の細かな部分形状を知ることができた。また主成分得点からの類型化を試みた結果、4 つの類型に分類することができ、各類型の特徴をとらえることができた。高齢女性の平均的な腰腹部の形状は、臀部の後突は小さいが、腹部の突出が大きく、胴くびれが多少見られる体型であると分かった。現在使われている下衣の主な原型作図法では胴囲と腰囲の寸法を基準として作図するが、腹部の突出が特徴的な高齢女性においては腹囲の寸法を考慮し、また脇のカーブやカット量、ダーツ量の配分やダーツの長さ等の考慮が必要である。

会 務 報 告

1. 平成 20 年度 会務報告

1) 事業報告

① 総会

日時：平成 20 年 8 月 25 日（月）

場所：日本女子大学 新泉山館国際交流センター

② 夏期セミナー 「工業製品としての衣服 —先端研究からアパレルの現場まで—」

日時：平成 20 年 8 月 25 日（月）・26 日（火）

場所：日本女子大学 新泉山館国際交流センター

③ 全国中学生創造物づくり教育フェアへの後援

日時：平成 21 年 1 月 24 日（土）・25 日（日）

場所：シアター1010

足立区立千寿桜堤中学校

④ 平成 20 年度 文部科学省 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公开发表（B）」による公開講座 「生活の質を高める衣服 — 健康で自立した高齢期を過ごすために —」

日時：平成 21 年 3 月 21 日（土）

場所：キャンパスプラザ京都

⑤ 部会誌 30 周年記念特集号発行

平成 21 年 3 月 31 日（火）

⑥ ホームページの維持管理

2) 庶務報告

① 第 1 回運営委員会

日時：平成 20 年 6 月 1 日（日）

12：20～12：50

場所：日本女子大学 百 505 教室

i) 平成 20 年度事業計画について

- ・平成 20 年度夏期セミナーについて
- ・平成 20 年度公開講座について
- ・全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援
- ・ホームページの維持管理

ii) 平成 19 年度収支決算（案）について

iii) 平成 20 年度予算（案）について

iv) 部会誌 30 周年記念特集号について

v) その他

・名誉会員の推薦

・平成 21 年度科研費申請について

② 第 2 回運営委員会

日時：平成 20 年 8 月 25 日（月）

11：00～12：00

場所：日本女子大学新泉山館国際交流センター

i) 平成 20 年度総会について

ii) 平成 20 年度夏期セミナーについて

iii) 平成 20 年度公開講座について

iv) 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

v) 部会誌 30 周年記念特集号について

vi) その他

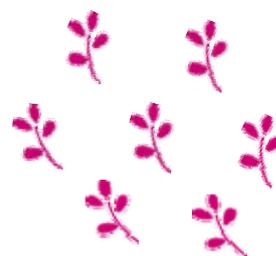
・各係からの報告

・平成 21 年度科研費申請について

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 平成 21 年度事業計画

- | | |
|------------------------|--------------|
| ① 総会 | 平成 21 年 8 月 |
| ② 夏期セミナー | 平成 21 年 8 月 |
| ③ 全国中学生創造物づくり教育フェアへの後援 | 平成 22 年 1 月 |
| ④ 研究例会 | 平成 22 年 3 月 |
| ⑤ 部会誌 31 号発行 | 平成 22 年 3 月末 |
| ⑥ ホームページの維持管理 | |
| ⑥ その他 | |



平成 19 年度 被服構成学部会夏期セミナー 収支報告

■ 夏期セミナー

収入の部 (円)

費目	予算	決算	備考
参加費	780,000	955,500	部会員 (13,000×56) 非会員 (15,500×13) 学生 (6,500×4)
総会費	100,000	100,000	被服構成学部会より
合計	880,000	1,055,500	

支出の部

費目	予算	決算	備考
会場費	67,000	70,000	
講師謝金	55,555	55,555	所得税 5,555 円を含む
資料作成費	20,000	30,000	
要旨集代	70,000	73,500	
印刷費	30,000	13,335	
通信費	55,000	17,630	
人件費	80,000	79,680	
会議費	115,000	145,894	
庶務費	30,000	8,539	
交通費	60,000	92,310	
昼食代	80,000	85,696	
雑費	50,000	43,018	美術館見学科 28,000 円 (70 名分) を含む
予備費	167,445	0	
合計	880,000	715,157	

差引残高= ¥ 340,343

■ 懇親会

収入の部 (円)

費目	予算	決算	備考
懇親会費	280,000	318,000	(7,000×45) 3,000 円寄付を含む

支出の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	280,000	318,000	

差引残高= ¥ 0

会計 林 仁美, 川中美津子

上記事項に相違ございません。

平成 19 年 11 月 4 日

会計監査

菊 藤 法
 奥 村 董

平成 19 年度 収支決算報告 (H19. 4. 1~H20. 3. 31)

(1) 部会会計

(円)

	費 目	予 算	決 算	備 考
収 入	部会費徴収	375,000	359,500	103 人分(複数年払い込みを含む)
	その他の収入	0	89,055	寄付金 50,000 円, 公開講座昼食代 67 食分 33,500 円, 夏期セミナー会計より預かり講師税金 5,555 円
	基金より	720,000	90,861	
	前年度繰越金	0	0	
	計	1,095,000	539,416	
支 出	総会運営費	100,000	100,000	
	部会誌発行費	110,000	100,485	部会誌印刷
	人件費	50,000	50,000	公開講座アルバイト代
	会議費	70,000	7,943	公開講座参加者茶菓, 運営委員会引継茶菓代
	庶務費	60,000	3,183	
	通信費	60,000	52,266	部会誌発送等
	交通費	150,000	28,810	
	事業費	465,000	191,174	ものづくり競技会, HP 更新・維持管理, 公開講座
	税金分	20,000	5,555	講師謝金の税金分
	予備費	10,000	0	
	基金へ	0	0	
	計	1,095,000	539,416	

差引残高

0

(2) 基金

2,777,615

(内訳)	前年度繰越金	2,524,466
	利子	3,667
	夏期セミナー余剰金	340,343
	19 年度差引残高	-90,861

私ども監事は、被服構成学部会の会計監査を行なった結果、上記事項に相違ないことを認めます。

平成 20 年 4 月 1 日

監事

金子喜子 

監事

高部啓子 

平成 20 年度 被服構成学部会 予算

(1) 部会会計

(円)

費 目		20 年度予算	19 年度予算	増減
収 入	部会費徴収	325,000	375,000	-50,000
	その他の収入	0	0	0
	基金より	205,000	720,000	-515,000
	前年度繰越金	0	0	0
	計	530,000	1,095,000	-565,000
支 出	総会運営費	100,000	100,000	0
	部会誌発行費	150,000	110,000	40,000
	人件費	10,000	50,000	-40,000
	会議費	20,000	70,000	-50,000
	庶務費	20,000	60,000	-40,000
	通信費	30,000	60,000	-30,000
	交通費	30,000	150,000	-120,000
	事業費	150,000	465,000	-315,000
	税金分	10,000	20,000	-10,000
	予備費	10,000	10,000	0
	基金へ	0	0	0
計	530,000	1,095,000	-565,000	

(2) 基金

(円)

	現在高	支出	残高
活動基金	2,777,615	205,000	2,572,615

お 知 ら せ

1. 会費納入について

平成21年度の被服構成学部会費2500円は、5月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00950-1-86639 日本家政学会被服構成学部会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒543-0073 大阪市天王寺生玉寺町7-72

大阪夕陽丘学園短期大学 ファッション表現学科 林 仁美 宛

TEL 06-6771-5183 (代表)

FAX 06-6770-2888 (代表)

E-mail hayasi@oyg.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒658-0001 神戸市東灘区森北町6-2-23

甲南女子大学 人間科学部 生活環境学科 森 由紀 宛

TEL 078-413-3004 (ダイレクトイン)

FAX 078-413-3004 (ダイレクトイン)

E-mail moriyuki@konan-wu.ac.jp

※ なお、退会届につきましては(社)日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成21年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

4. 平成20年度新入会員

松田裕子(北陸学院高等学校) 砂長谷由香(文化女子大学) 井口彰子(文化女子大学短大部)

葛西美樹(東北女子大学) 工藤寧子(東北女子大学) 小野寺美和(東筑紫短期大学)

ご 案 内

平成 21 年度 被服構成学部会 総会並びに夏期セミナー 「社会的ニーズに対応したアパレルの開発動向」

期 日： 2009 年 8 月 25 日（火）、26 日（水）

会 場： あわら温泉 グランディア芳泉（〒910-4193 福井県あわら市舟津 43-26）

プログラム

	8 月 25 日（火）		8 月 26 日（水）
13:15～	受付開始	9:30～10:30	話題提供 1
13:45～13:50	開会の辞		「産学連携で取り組む被服構成学的視点からの商品開発」（仮題）
13:50～14:50	講演 1 「今、繊維・アパレル産業の展開に 何が必要か？」 福井大学大学院工学研究科教授 堀 照夫 氏	10:30～10:40	日本女子大学教授 大塚美智子 氏
14:50～15:00	休憩	10:40～11:40	休憩
15:00～16:30	講演 2 「ビスコテックスによるパーソナル オーダー事業について」（仮題） セーレン株式会社 ビスコテックス 部門統括 執行役員 牧田博行 氏	11:40～11:50	話題提供 2
16:30～16:40	休憩	11:50～13:00	「当センターのスマートテキスタイルの取り組みについて」 福井県工業技術センター 化学・ 繊維部 主任研究員 村上哲彦 氏
16:40～17:10	総会	13:00～16:00	閉会の辞
18:00～20:00	懇親会		昼食休憩
			見学
			① 井上ブリーツ株式会社
			② ビスコテックス スクエア福井

※ 部会員には追って詳細をご案内申し上げます。

連絡先 〒910-8507 福井市文京 3-9-1 福井大学教育地域科学部 服部由美子

E-mail yhattori@f-edu.u-fukui.ac.jp TEL&FAX 0776-27-8721

被服構成学部会 30 周年記念特集

被服構成学部会活動の30年

部会長 泉 加代子(京都女子大学)

被服構成学部会は、1979年10月の第1回総会で、被服構成学研究委員会を改め、日本家政学会の一部会として発足しました。部会発足から30年、前身である研究委員会を加えると40年の長きにわたる活動について、部会では若輩者の私が述べることは甚だ僭越ですが、部会をリードされてこられた諸先生方が書き留めて下さった記録をもとに振り返ってみたいと思います。

被服構成学研究委員会10年の活動については、「家政学雑誌」Vol. 30, No. 1(1979)に高橋キヨ子先生が書かれています。1969年に125名の会員で誕生した委員会は、高度経済成長期という時代の波にのって8年後には277名に達しています。構成学の基礎固めをして学問水準を高め、体系化を進めるために研修会や講習会が活発に行われました。被服構成学の「創生期」といえる時期です。

その後、10年ごとの部会活動を「家政学会誌」を参考にして概説しますと、I期(1979-1987)は、古松弥生先生がVol. 39, No. 5(1988)に報告されています。総会、夏期セミナー、講演会、見学会、談話会、部会誌発行の部会活動のほか、研究委員会から引き継いだ工業技術院の体格調査への参加や2件の共同研究の報告書「被服の設計・製作に関し優れた技術をもつ専門家の調査」(1980)、「全国小中学生の着衣実態調査」(1982)を作成しています。「被服構成学の領域と内容」(1982)と「大学における被服構成学のカリキュラム」(1983)のアンケート調査を実施し、「中・高校の被服教育に関する要望書」を文部事務次官や教育課程審議会委員に提出する働きかけも行われました(1987)。192名で発足した会員数は293名まで増え、被服構成学の「成長期」に相当する時期です。

II期(1988-1997)は、Vol. 49, No. 5(1998)に中保淑子先生が報告されています。共同研究がさ

らに活発に行われ、「既成衣料サイズ表示と購入の実態に関する研究報告書」(1991)、「乳幼児衣料の表示と着衣の実態研究報告書」(1993)、「被服構成学に関する教育の試み」(1994)の3冊の報告書が作成されました。他の部会に先駆けて、CG、CAD、Lotusを使ったパソコン講習会も開催しています(1995, 1996)。大学から「家政」「被服」「被服構成学」の名称が消えていった時代でしたが、部会員だけでなく高校教員を対象とした公開講座「いま！被服教育に求められるもの」(1997)、「高齢者と衣服」(1998)を開催し、文部大臣諮問機関へ意見書を提出して(1995, 1996)、被服製作の重要性を主張しました。会員数は259名と若干減少しましたが、「成熟期」といえる時期でしょう。

III期(1998-2007)についてはVol. 60, No. 3(2009)に掲載予定です。少子化と大学(特に被服分野)を取り巻く環境の変化にともない会員数は156名(2008)まで大幅に減少しましたが、それに負けず、国際交流や社会との連携へと事業を拡大しました。3回の海外研修(1999, 2002; アメリカ合衆国東海岸, 2005; フランス・イタリア)、科研費補助金研究成果公開促進費による「ものづくり」をテーマとした高校生や高校教員対象の公開講座の3年連続開催(2004, 2005, 2006)、高校教員対象の公開講座「高齢者と衣服」(1998)と一般市民対象の公開講座「生活を豊かにする衣服」(2008)の開催、全国中学生創造ものづくり教育フェアの後援・協賛(2003~)、「被服製作に関わる授業の実践例」の報告書作成などを行い、部会活動の活性化を図りました。「〇〇期」と名付ければよいかは部会員の皆様で考えてください。

今後、部会が40周年、50周年を迎えるためには、部会員の皆様の協力が必要です。よろしくお願いたします。

歴代部会長・副部会長一覧

	年 度	部会長 (所属)	副部会長 (所属)
1	昭和 55・56	祖父江 茂登子 (埼玉大学)	樋口 ゆき子 ・ 古松 弥生 (日本女子大学) (十文字学園女子短大)
2	昭和 57・58	同 上	同 上
3	昭和 59・60	増田 茅子 (広島大学)	古松 弥生 ・ 山名 信子 (十文字学園女子短大) (京都女子大学)
4	昭和 61・62	古松 弥生 (十文字学園女子短大)	樋口 ゆき子 ・ 山名 信子 (日本女子大学) (京都女子大学)
5	昭和 63 平成 1	山名 信子 (京都女子大学)	三吉 満智子 ・ 木岡 悦子 (文化女子大学) (甲南女子大学)
6	平成 2・3	三吉 満智子 (文化女子大学)	木岡 悦子 ・ 清水 薫 (甲南女子大学) (昭和女子大学)
7	平成 4・5	木岡 悦子 (甲南女子大学)	松山 容子 ・ 中保 淑子 (大妻女子大学) (椋山女学園大学)
8	平成 6・7	松山 容子 (大妻女子大学)	中保 淑子 ・ 林 隆子 (椋山女学園大学) (信州大学)
9	平成 8・9	中保 淑子 (椋山女学園大学)	福井 弥生 ・ 林 隆子 (京都女子大学) (信州大学)
10	平成 10・11	林 隆子 (広島大学)	永井 房子 ・ 古田 幸子 (相模女子大学) (広島大学)
11	平成 12・13	永井 房子 (相模女子大学)	畠山 絹江 ・ 高部 啓子 (京都女子大学) (実践女子大学)
12	平成 14・15	高部 啓子 (実践女子大学)	大村 知子 ・ 富田 明美 (静岡大学) (椋山女学園大学)
13	平成 16・17	大村 知子 (静岡大学)	富田 明美 ・ 猪又 美栄子 (椋山女学園大学) (昭和女子大学)
14	平成 18・19	猪又 美栄子 (昭和女子大学)	泉 加代子 ・ 雲田 直子 (京都女子大学) (東京家政大学)
15	平成 20・21	泉 加代子 (京都女子大学)	布施谷 節子 ・ 岡部 和代 (和洋女子大学) (京都女子大学短期大学部)

(所属は当時の所属)

元部会長・副部会長からのメッセージ

木岡 悦子

(甲南女子大学名誉教授・元京都女子大学教授)

研究委員会の10年間を経て発足した被服構成学部会が30年を迎えるという記念すべきとき、ここに参加できますことをうれしく、心からお慶び申し上げます。

それにつれて思い浮かびますことは、何の研究歴も持たない私がいきなりこの道に飛び込みましたその頃のこと、部会員の皆様の熱意に驚くばかりの日々でありました。

当時、暗室状態での発表会場はどの会場も満員で、立ったままで聞き入る研究者たちで一杯でありました。新制大学発足に伴って開設された家政学の中で、それまでの裁縫を学問として打ち立てる切実な気迫が感じられました。

着衣する人体を綿密な計測からその形態を把握する、また、つねに関節の移動によって複雑に変異する動態をも捉え、これらのデータから布素材やデザインを絡み合わせてどのように衣服として構成するか、多くの研究が積み重ねられて今日に至りました。

既製服産業への貢献は目覚しく、今日の豊かなファッション社会を見るに至ったといえましょう。よろこばしいことであります。

さて、これから本部会が進むべき目標をどこにおくのか、これこそ部会員各位の叡智を集められるべき重要なときにさしかかっているといえましょう。真に人間のしあわせを追求する中で、大きくは宇宙環境の問題を含めて、より人々にやさしい衣服が求められています。

先生方のやわらかい発想と更なるご研鑽のもとに、部会という貴重なチームワークによる成果が発揮されますことを期待し、ご挨拶に代えたいと思います。

松山 容子

(大妻女子大学名誉教授)

何よりも、被服構成学部会30周年、部会員の皆様のご尽力に、心から感謝申し上げます。

さて、国民生活白書が国民の価値観は「物離れ傾向」、「物質的充足から情報へシフトしている」と論じた1977年頃からほぼ30年が経ちました。そして今、時代は大きな転換点を迎えているようです。個人・社会が生存し続けるために資源・環境の面でのサステナビリティでは間に合わないと言われていました。

実は私は昨年、ある大学で衣生活論と被服構成学の2科目を担当して、「人々の衣の意識」を改めて確認するような経験をしました。科目を選択した学生は、「綿・ウール・ポリエステルなどの言葉は聞いたことがあるが、自分の服のどれにどの様に使われているか知らない、気にならない」、「服に裏が付いてるとかどんな仕立てとか知らない、気にならない」、「ファッションにはまあ関心はある」と言うのです。この傾向、実は被服学専攻の学生でも感じてはいたのですが、さらに一段の落差があり驚きました。そして思ったのです。これは当の学生だけのことではなく、一般市民の衣服への認識の様相を反映するのだろうと。

物質的に豊かになった現代では、ファッション性、ブランドネームなどと言った情報的価値が衣服購入や産業発展の大きな原動力となっており、これが衣服の浪費にもつながる危険を孕んでいます。かつて我が国には「物」を慈しみ、大切に使うという暮らしの文化がありました。今後、個人・社会が健やかに生存していくために、衣服についても「物」としての意味や価値をもう一度確かめる必要があるのではないかと思います。

中保 淑子

(栢山女学園大学名誉教授)

被服構成学部会発足 30 周年、誠におめでとう
ございます。この長い歴史を振り返って見ますと
き、時代とともに歩んだ部会の創設期、活動期、
円熟期、再創造期とでも言えるような大きなうね
りのそれぞれにおいて、部会員の被服に対する情
熱の成果が生まれたこの 30 年の実績をあらため
て誇らしく思います。

戦後、「被服構成学」という新しい学問領域を誕
生させ、学理の探求と同時に被服における研究と
実践の道を拓いて下さった柳澤澄子をはじめ先達
の先生方のご苦勞と礎があればこそと感慨を深く
し、感謝する次第です。

この部会に私が入会させていただいたのは、
当時被服基台である体型把握のための生体石
膏レプリカ作製の意義が唱えられ彫塑履歴がご縁
でありました。本務校の大学院教授に故土井サチ
ヨ先生をお迎えして、私は被服構成学の基礎から
やり直し研究の何たるかを学びました。また、部
会夏期セミナー、講演会、研究例会等で斬新な刺
激を受け、勉強させていただきました。やがて全
国規模の先生方とお話をさせて頂くにつれ、私の
部会活動は生活の中心となり、長引いた運営委員
会の時などは最終新幹線に同じ方向の先生方と飛
び乗ったことなど、楽しく思い出されます。

或る一つの目的に向かって、所属する人たちが
知恵を出し合い協力し合って、より良いものを作
りあげる素晴らしさや社会に貢献する喜びを「日
本人体格調査」の人体計測を始めとするいくつか
の事業活動を通して経験してまいりました。これ
は部会のよき伝統と言えるでしょう。すでに技術
革新の時代となり、社会情勢も変化しつつありま
すが、常に被服の原点に立ち戻り、発想の転換点
を討論してみるのもよいのではないのでしょうか。

福井 弥生

(徳島文理大学教授)

被服構成学部会誌第 30 号発刊の節目に当たり
「被服構成学」の名称の成り立ち、歩みをふりか
えり、今後の研究・教育に繋げたいと思う。

新制大学発足が 1948 年（昭和 23 年）である。
戦前の旧制国立大学には女子大学は認可されず、
女子高等専門学校のみであった。新制女子大学
となり、女子教育に重要な「裁縫」は技術中心で、
理論は確立しておらず、女子大学家政学部・被服
学科に学問として組み入れるには大変ご苦心され
たようである。

新制女子大学発足当初、家政学の重要な科目で
ある「裁縫」を「被服工作論」として発足した。
即ち、技術のみでなく理論的な研究法も含めた内
容であり、先達の研究者のご苦勞により、1957 年
（昭和 32 年）には「被服構成学」の科目名で講義
が始まった。以後、現在まで被服学科の主要な柱
となっている。

一方、昭和 55 年家政学会総会において「ヒープ
のためのカリキュラム案」に「被服構成学」が入
らないという問題が起り、被服構成学部会から必
要との書面を提出し、受理された経緯がある。「被
服構成学部会」発足の前身、1976 年（昭和 51 年）
柳沢澄子教授のご指導の元、「被服構成学研究委
員会」（会員数 250 名）が結成された。柳沢教授は
ご自身の研究を継承されてきた貴重なご経験から、
被服構成学の研究内容、方法をご指導下さった。
これらの研究方法が、今日の被服構成学のゆるぎ
ない基礎（根幹）となっている。

現在は既製服中心の衣生活と云って過言でない。
「被服構成学」の基礎のもと、アパレル製品、サ
イズ問題、被服材料と縫製技法、着方の心理・快
適性等々、加えて着方の基本と作法を教育する必
要性を痛感する今日である。

古田 幸子
(広島大学名誉教授)

被服構成学部会発足 30 年、本当におめでとう
ございます。このめでたい節目の時に執筆依頼を
いただき大変光栄なのですが、何分定年退官後数
年が経ち、辺鄙な下田舎に蟄居していますので、
はたして責を果たすことができるのか、今まさに
更なる志を翳して飛ぶ勢いの皆様に参考にはなら
ないと思いますが、私の研究生生活の反省を込めた
一端を述べて責を果たしたいと思います。

私は最初被服整理学の分野で黴の研究をしてお
り、それなりの成果も得て 10 数年を経、学位も取
得しましたが壁に突き当たっていました。やはり
家政学の出身では基礎学力に欠け、限界があるこ
と、今後より高度且つ先端研究を続けるには医学
部並みの研究設備と覚悟が必要なことを実感して
いました。その頃教育系大学に移ることになり、
それを機に被服構成学に転向し最初大変苦労しま
した。ミクロからマクロへ、範囲が広すぎて多岐
に亘り焦点が掴めない、いくつかの柱やその分野
の先生方は追々わかりましたが、中々積極的に学
会へ入っていけなかった記憶があります。自分な
りに試行錯誤を繰り返しながら研究を続けていき
ましたが、その間感じたことは、被服構成学はと
てつもないマグマをはらんだ、発展性・未来性の
ある分野ではないか、ということでした。先ず、
被服領域の中で最も密に教育とコラボレーショ
ンができる、且つ、学生が興味・関心を持ちやすい
分野です。そして、国際的な規模のテーマが身近
にある、これらが最も根幹となる発展する要素だ
と考えます。そのためには、個々の部会員の更な
る研鑽と発展、指導面では魅了するような、生き
生きとした授業、公開講座、研究例会、等を頻繁
に実施することが望ましいと考えます。

ますますの被服構成学のご発展を遠い空から祈
念しています。



被服構成学の教育・研究の動向

昭和女子大学 猪又 美栄子
東京家政大学 雲田 直子

被服構成学部会が昭和54年(1979)に設立されて30周年を迎えました。この30年の歩みを、総会の基調講演(表1)、夏期セミナー(表2)、談話会・研究例会(表4)、公開講座(表5)、部会企画の海外研修旅行(表2)の5つの表にまとめました。これらの表を見ると、部会の歴史、被服構成学の教育・研究の環境がどのように変化したかなどが浮かびあがってくるように思います。例えば、総会は昭和57年度までは秋に開催されていましたが、昭和58年度から夏期セミナー時に開催されています(2回の例外を除いて)。被服構成学部会にとって夏期セミナーは大きな行事であり、総会を部会員が集まり、交流しやすい時期に移動したと考えられます。また、夏期セミナーも以前は2泊3日で行っていました。ゆっくりとこれらの表をご覧ください。比較的新しい部会員の方にとっても、発見があるかもしれません。なお、昭和59年から始まった談話会はその後研究例会に発展しましたので、談話会と研究例会は一緒にまとめました。せっかくの機会なので、きちんと整理して、30年の歴史がひと目でわかる保存版にしたいと思いました。しかし、被服構成学部会誌20周年記念号を参考にして整理しているうちに、「いつの間にか」年齢を重ねてしまった私たちの記憶が定かでないことも出てきましたので、周辺の部会員のお力もお借りして情報を集め、表を作成しました。できるだけ正確に作成することを心がけましたが、もしお気づきのことがありましたら、お知らせください。次の40周年に向けて!

これらの記録から、被服構成学の教育・研究の動向を探ってみたいと思います。私たちの独断で書いていることをお許しください。

被服構成学部会の前身は被服構成学研究委員会です。1969年にお茶の水女子大学教授 柳澤澄子先生の呼びかけにより125名の会員で発足しています。そして10年間の活動の後、被服構成学部会に発展的に移行したのです。被服構成学研究委員会の会則には「会員相互の研究に関する連絡および協力をはかり、被服構成学に関する研究を促進すること」という目的が書かれています。被服構成学の基礎を固め、学問水準を高めようとしていたわけです。(ちなみに、現在の会則の2条(目的)では、教育・研究となっています。)したがって、被服構成学部会が設立されて最初の10年は「被服構成学に関する研究方法」について事例報告やシンポジウムが活発に行われています。研究内容も多岐にわたっています。衣服原型・パターンに関するものとしては、衣服のゆとりの問題、コンピュータによる自動製図や人体体表展開図などがあります。素材と造形に関わる縫製科学や今は懐かしいモアレ計測も取り上げられています。総会では、労働科学から深層心理学まで様々な分野で活躍されている講師が講演されています。この時期は、被服構成学にどのような研究手法を取り入れるか、測定や実験の方法や問題点を探るなど、研究の質を高めようと努力していた時期ではないでしょうか。部会活動も活発に行われ、被服構成学部会となって10年目の1988年には会員数293名に達しています。

10年目から20年目の被服構成学部会は、家政学や被服学を取り巻く環境の変化により会員数は漸減傾向を示し、1997年3月には会員数259名となっています。この時期の夏期セミナーでは、被服構成学の教育・研究の方向を探るシン

ポジウムやフォーラムが度々行われています。

「21世紀をのぞむ被服学教育－被服構成学の諸問題をうけて－」、「被服構成学における教材研究とカリキュラム」、「新しい被服構成学を求めて」等々です。被服構成学の教育をどのようにするのか、どのようにして学生に興味を持たせたらいいのか、理解を深めさせるための工夫など、具体的な授業運営も含めて「教育」に目が向けられた時期といえるでしょう。同時に高齢社会を目前にして、高齢者や障害者の衣服が取り上げられ、被服構成学の研究・教育の社会貢献についても言及されるようになりました。

20年目から30年目の最近10年は、少子化の影響をはじめとした大学の環境が激しく変化しており、被服学に携わる教員や助手の減少したことの影響を受けて平成20年4月には会員が156名になっています。残念なことです。しかしながら、この10年、このような厳しい現状の中で運営委員をはじめとした被服構成学部会員は活発に部会活動を行ってきました。夏期セミナーや研究例会の他に、国際交流に関わる活動では、3回の海外研修が実施され、2002年の海外研修では、ニューヨークで開催されたITAAの国際会議に参加しました。また、社会との連携では、全国中学生創造ものづくりフェアへの後援・協賛を行い、高校生への働きかけとしては、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）により、ものづくり研究公開講座を3回開催しました。また、平成20年3月には一般の社会人を対象とした公開講座として、生活を豊かにする衣服－着心地の良い快適な衣服を求めるために－を開催し、部会員の研究成果を公表しました。会場となった和洋女子大学の近隣の高齢者や障害者の方々が参加され、部会員もたいへん刺激を受けました。最近の10年は、社会や海外との連携に目を向けて努力した時期と言えるでしょうか。

最近10年の夏期セミナーの記録から、「被服

構成学は福祉社会にどのように貢献していくか」、「新 人体計測考 ユニバーサルデザイン の視点から」など、被服構成学の研究実績を社会に役立てようという姿勢が見えるというのは、手前味噌でしょうか。同時に、ファッション、工業製品としてのアパレルも取り上げられています。また、教育現場や研究を伝えるためのプレゼンテーション技術としてコンピュータの演習も他に先駆けて行われました。

超高齢社会の中で、高齢者や障害者にとって着心地が良く外観も満足できる衣服が求められています。若者にもおしゃれで健康に良い衣服が必要でしょう。被服構成学部会の部会員の教育・研究の蓄積が社会に役立つように、さらに社会との連携を深めていく必要があります。今後も、部会員同士が協力し、切磋琢磨できる場として、被服構成学部会がますます発展することを願います。

最後になりましたが、被服構成学部会の共同研究の成果が出版されていますので、記します。

1980年7月

被服の設計・製作に関して優れた技術を持つ専門家の調査第1集

1982年3月

全国小・中学生の着衣実態調査報告書

1991年1月

既製衣料サイズ表示と購入実態に関する研究報告書

1993年3月

乳幼児衣料の表示と着衣の実態研究報告書

1994年1月

被服構成学に関する教育の試み
(被服構成学部会誌 特集号)

2004年3月

被服設計に関わる授業の実践例

表1 総会の記録

	開催年度	開催場所・日時	基調講演
1	昭和54年度	山王会館(名古屋) 昭和54年10月8日	働きやすさの構造 労働科学研究所 小木 和孝氏
2	昭和55年度	蛇の目ミシン会議室(東京) 昭和55年10月13日	被服設計のための研究のシステムの考察 東京大学教養学部長 磯田 浩氏
3	昭和56年度	文化女子大学(東京) 昭和56年9月25日	既製衣料サイズの国際化 東京工業大学名誉教授 石川 章一氏
4	昭和57年度	国立民族学博物館(大阪) 昭和57年9月24日	MCD—民博服装データ・ベースの構想 国立民族学博物館助教授 大丸 弘氏
5	昭和58年度	大阪ガーデンパレス(大阪) 昭和58年8月2日	日本文化の源流—考古学からみた衣服 同志社大学教授 森 浩一氏
6	昭和59年度	東京ガーデンパレス(東京) 昭和59年8月2日	骨からみた日本人の起源と変遷 東京大学名誉教授 鈴木 尚氏
7	昭和60年度	白島会館(広島) 昭和60年7月31日	衣服と社会生活 広島女子大学学長 今堀 誠二氏
8	昭和61年度	東京ガーデンパレス(東京) 昭和61年7月28日	多変量解析法応用上の諸問題 東京理科大学教授 芳賀 敏郎氏
9	昭和62年度	京都平安会館(京都) 昭和62年7月31日	布物性と仕立て映え 京都大学教授 川端 季雄氏
10	昭和63年度	愛知厚生年金会館(名古屋) 昭和63年8月1日	ホログラフィーによる三次元ディスプレイと計測 千葉大学教授 辻内 順平氏
11	平成元年度	六甲荘(神戸) 平成元年7月28日	深層心理学よりみた被服 京都大学教授 河合 隼雄氏
12	平成2年度	メルパルク横浜(横浜) 平成2年7月30日	人体の形態的特性について—性差・加齢に伴う変化 立教大学教授 香原 志勢氏
13	平成3年度	箱根湯元ホテル(箱根) 平成3年7月30日	匂いのサイエンス—被服を取り巻く環境として 群馬大学名誉教授 高木 貞敬氏
14	平成4年度	岐阜グランドホテル(岐阜) 平成4年8月18日	生活科学における環境への視点 岐阜市立女子短期大学学長 小瀬 洋喜氏
15	平成5年度	南海サウスタワーホテル大阪 平成5年7月30日	生活と文化 京都市立芸術大学学長 上山 春平氏
16	平成6年度	オンワード総合研究所(横浜) 平成6年8月18日	年齢神話をくつがえす 大妻女子大学教授 松山 美保子氏
17	平成7年度	ラフォーレ修善寺(修善寺) 平成7年8月18日	被服関係部会合同夏季セミナーのため総会のみ実施
18	平成8年度	広島国際会議場(広島) 平成8年7月30日	感性工学とデザイン 広島大学名誉教授 長町 三生氏
19	平成9年度	京都テルサ(京都) 平成9年8月28日	三次元人体形状モデルの作成と服飾への応用 京都大学教授 美濃 導彦氏
20	平成10年度	アルカディア市ヶ谷(東京) 平成10年8月27日	被服教育への提言と実践 お茶の水女子大学名誉教授 柳沢 澄子氏
21	平成11年度	サンピア福山(福山) 平成11年10月15日	メンズユニフォームの機能性 自重堂ユニフォーム企画部 児玉 久光氏
22	平成12年度	大妻女子大学千代田校舎 平成12年8月24日	CGを使ったテキスタイルデザイン教育の試み 京都女子大学短期大学部教授 畠山 絹江氏
23	平成13年度	東レ総合研修センター(三島) 平成13年8月29日	被服学教育の動向 元広島大学教授 林 隆子氏
24	平成14年度	アルカディア市ヶ谷(東京) 平成14年8月28日	加齢や病気・けがによる身体の変化 東京女子医科大学付属第2病院 井上 和彦氏

	開催年度	開催場所・日時	基調講演
25	平成15年度	実践女子大学(東京) 平成15年8月27日	被服関係部会合同夏季セミナーのため総会のみ実施
26	平成16年度	昭和女子大学(東京) 平成16年8月30日	衣服設計の基本としての人体計測 実践女子大学教授 高部 啓子氏
27	平成17年度	日本女子大学(東京) 平成17年10月30日	高齢になるとは、障害を持つとは 桜新町リハビリテーションクリニック院長 長谷川 幹氏
28	平成18年度	東京家政大学(東京) 平成18年8月22日	わかりやすい授業のためのIT技術 東京家政大学教授 松木 孝幸氏
29	平成19年度	神戸ファッション美術館(神戸) 平成19年8月27日	アンダーウェアとプロポーションの歴史 神戸ファッション美術館学芸員 百々 徹氏
30	平成20年度	日本女子大学(東京) 平成17年10月30日	グローバル視点から見たアパレル企業動向 エコテックジャパン株式会社社長 近藤 繁樹氏

表2 部会企画海外研修旅行

開催年度	テーマ	見学先・訪問先etc.
第1回海外研修旅行 平成11年8月26日～9月4日 実行委員長 相模女子大学 永井房子	アメリカンキルトのルーツとニューヨークファッションを訪ねて	昭和女子大学ボストン校 / アメリカ織物歴史博物館 / ニューイングランドキルト美術館 / ボストン美術館 / プリマスプランテーション / ロードアイランド大学 / ファッション工科大学(FIT) / メトロポリタン美術館アントニオ・ラッティテキスタイルセンターなど
第2回海外研修旅行 平成14年8月7日～8月16日 実行委員長 実践女子大学 高部啓子	ITAA年次大会とアメリカ東部のテキスタイル文化と研究機関視察	国際衣服学会(ITAA)年次大会参加 メトロポリタン美術館企画展”ギルバート・エイドゥリアン展” / ハグリー博物館 / ノースカロライナ州立 大学繊維学部&ユニバーサルデザインセンター / TCスクエア公社など
第3回海外研修旅行 平成17年8月30日～9月10日 実行委員長 川村短期大学 田中美智	フランス・イタリアのアパレルの現状視察	カニユ博物館 / アトリエ・ド・ソワリー / リヨン織物歴史博物館&装飾芸術博物館 / リヨン繊維化学技術大学 / フランス繊維・アパレル研究所(IFTH) / クリスチャンディオール美術館生誕100年記念展覧会 / '05バリプレタポルテ展示会 / ルーブル美術館 / アキール・ピント社 / 絹教育博物館 / ロンチ・ピエロ社 / ピエロウッチ社など

表3 夏期セミナーの記録

年度 会場 実行委員長	テーマ	内容(講演・シンポジウムetc.)	研究事例報告etc.	見学etc.
昭和55年 8月24・25・26日 国立婦人会館 埼玉大 祖父江茂登子	講演「人類史における技術と科学」 東京工業大 道家達将 講演「測定誤差に関する講義」 青山学院大 横山異子 パネルディスカッション「人体と被服設計」 ①快適さの生理に影響する内外的要因 奈良女大 登倉尋実 ②胸囲という計測量についての二三の解析 東京大 保志 宏 ③被服設計上の問題点 大阪市立大 三平和雄 (司会)大妻女大 芦澤玖美	「衣服のゆとり」の研究 ①婦人衣服基本形態のゆとり 福山市立女短大 増田茅子/増田智恵 ②衣服圧によるゆとり量の検討 文化女大 田村照子/嶋根歌子 ③衣服の素材とゆとり感との関連 都立立川短大 林隆子/桃厚子 ④衣服のゆとりと動作適合性について-袖と袖ぐりの構造-お茶の水女大 猪又美栄子/堤江美子/西野美智子 (司会)広島女大 小池美枝子 「測定誤差」 ①素材の特性とギヤザー効果 東海学園女短大 辻啓子 ②人体計測にともなう誤差に関する研究 お茶の水女大 梶見素子 (司会)日本女大 樋口ゆき子		
昭和56年 8月20・21・22日 国立婦人会館 埼玉大 祖父江茂登子	講演「衣服製作ならびに衣服着用過程における布の変形」 奈良女大 丹羽雅子 講演「至適温度を中心に快適性を考える」 労働科学研究所 三浦豊彦 シンポジウム 「被服構成学の領域」-研究と教育- (パネラー)帝塚山学院短大 南日朋子/日本女大 樋口ゆき子 /京都女大 福井弥生/大妻女大 松山容子/文化女大 三吉満智子 (司会)都立立川短大 林隆子/実践女大 飯塚幸子	「被服構成学に関する研究方法の問題点」 ①モアレ計測について 日本女大 山田喜美江・樋口ゆき子 (座長)京都女大 山名信子 ②基本形態婦人衣服の着用実験の問題点 福山市女短大 増田智恵・増田茅子 (座長)帝塚山短大 南日朋子 ③布地の造形性能に関する実験試料の選定について 山梨県立女短大 小菅啓子/川村短大 安盛都子 (座長)東海学園女短大 辻啓子 報告「家政学将来構想特別委員会」 埼玉大 祖父江茂登子 報告「部会アンケートのまとめ」 十文字学園女短大 古松弥生		
昭和57年 8月3・4日 愛知厚生年金会館 静岡女大 河村房代	講演「現代における生活技術の意味」 日本経済新聞社 藤原房子 講演「スポーツ体育運動の体の動き」 愛知県立大 星川 保 講演「スポーツウェアに関する研究の動向」 デサント中央研究所 辻坂新二	衣服の適合性の評価に関する問題 ①基本動作について 京都女大 畠山絹江 (司会)静岡女大 河村房代 ②衣服圧について 鳥取大 伊藤紀子 (司会)信州大 関川信子 ③官能検査について 愛知教育大 古橋祥子 (司会)文化女大 三吉満智子		
昭和58年 8月2・3・4日 大阪ガーデンプレス 福山市立女短大 増田茅子	講演「被服教育(このぞむ)」 (株)カネボウファッション研究所 佐野正男			

昭和59年8月2・3・4日 東京ガーデンパレス 十文字学園女短大 古松弥生		講演「衣服圧について」 お茶の水女大 石川欣造 講演「縫製研究の問題点」 大阪市立大 三平和雄 講演「被服学教育におけるコンピュータ利用」 東京大 鈴木賢次郎	被服構成学に関するシンポジウム ①衣服の拘束について お茶の水女大 吉村博子 ②被服縫合部の損耗に関する研究 京都女大 福井弥生	蝶矢シャツ松戸工場
昭和60年 7月31日、8月1・2日 広島市白鳥会館 広島女大 小池美枝子		講演「新しい衣料素材の動向」 (株)丸紅繊維 二宮清延	被服構成学に関するシンポジウム ①「着衣のすれに関する研究」 京都女大 岡部和代 ②「新しい被服教育を求めて・四年制大学、短大のカリキュラムの現状に関する一考察」 愛知淑徳短大 竹下弓子 ③「被服構成学におけるコンピュータの活用」 武庫川女大 山川勝	万国製針K.K.
昭和61年 7月28・29・30日 東京 ガーデンパレス 文化女大 三吉満智子		講演「工業用ボイラについて」 クリエーションモード主宰 満清一 話題提供 ①非接触三次元計測装置による衣服と人体の断面計測 文化女大 三吉満智子 ②多変量解析的手法による成長期男女の体型分類 大妻女大 高部啓子 ③衣服の快適性と繊維素材 東洋紡績株式会社 原田隆司 ④婦人服のイメージ評価に関する調査研究 ノートルダム女大 榎田庸	シンポジウム「被服構成学教育の今後」 (司会)十文字学園女短大 古松弥生/京都女大 山名信子 (パネラー)東海学園女短大 辻啓子/成安女短大 山本和枝/鳥取大 伊藤紀子/福山女学園大 中保淑子 /共立女大 間壁治子	NEC川崎技術センター (非接触三次元計測装置) キヤボデザイン座間工場
昭和62年 8月3・4・5日 さよと平安会館 京都女大 山名信子		話題提供 ①高齢婦人のための衣服設計 相山女学園大 富田明美 ②成人女子の下肢部原型製図と形態因子との関連 県立新潟女短大 平沢和子 ③画像入力による三次元形状の測定→パレル設計工学への応用 大阪府立大 長江貞彦 講演「布と遊ぶ」 服飾デザイナー 森南海子 講演「仏像の服飾の着付け」 愛宕念仏寺住職・東京芸術大名譽教授 西村公朝	報告「教育課程審議会の中間まとめに関連して」 十文字学園女短大 古松弥生 「消費者問題の報告と今後の進め方」 十文字学園女短大 古松弥生/京都女大 山名信子	浅田K. K. 高級つづれ帯 の製造と友禅美術館
昭和63年 8月1・2・3日 愛知厚生年金会館 福山女学園大 中保淑子		講演「ウールのスケール改質とウオッシュャブルゲームント」 国際羊毛事務局 堀 満生 講演「家康遺産の染織品について」 徳川美術館 徳川義宣	「被服構成学における動作分析研究」 「子どもの歩容の発達」 昭和女大 猪又美栄子 「いせこみ性の客観的評価方法」 東京学芸大 嶋海多恵子 「被服構成におけるパソコン導入の試み」 福山市立女短大 増田智恵	徳川美術館 フアザー工業K.K.
平成元年 7月26・27・28日 神戸市六甲荘 甲南女大 木岡悦子		話題提供 ①乳幼児の体型と衣服について 京都文教短大 錢谷八栄子 ②新しい素材ハイオクワックウールとバイオラックシルク 大東紡織株式会社 河辺博治 ③アメリカで見た被服教育を中心として 都立立川短大 林隆子 講演「子供服とともに歩む」 (株)フアマリア 坂野惇子 講演「衣服と身体表現-民俗学の視点から」 国立民族学博物館 野村雅一	シンポジウム「大学における被服構成学の現状と課題」 (パネラー)実践女大 飯塚幸子/広島大 古田幸子 /岐阜市立女短大 山田令子 「消費者問題研究について」 消費者問題研究委員会	(株)フアマリア 北野坂ハウス 「アンティーク(18C後～20 C前)の子供服」 ワールド、田崎真珠

<p>平成2年 7月30・31日、8月1日 メルパルクエコハマ 川村短大 安盛都子</p>		<p>講演「マネキンの源流と変遷」 株式会社ローザ 高井一彦 題をうけて」 立短大 猪又美栄子/日本女大 小口登/山梨県 大 松山啓子/熊本大 高森寿/相模女大 永井房子/大妻女 (コメントーター)実践女大 城島栄一郎/鳴門教育大 藤原康晴/ 武庫川女大 山川勝 (司会)文化女大 三吉満智子/都立立川短大 林隆子 講演「工業製品としてのアパレル商品企画」 東洋紡FPI 恵美和昭</p>	<p>共同研究報告「消費者問題」について 文化女大 三吉満智子/京都女大 山名信子 「家政学シンポジウム」について 大妻女大 松山啓子</p>	<p>株式会社ローザ 可動マネキン・リアル フォーラムゲーム工場</p>
<p>平成3年 7月30・31日、8月1日 箱根湯元ホテル 川村短大 安盛都子</p>		<p>フォーラムⅠ「ファッションビジネスの現在と未来」 ①ファッションライフスタイル ファッションコミュニケーションデザイナー 西山栄子 市田株式会社 山崎昭男 ②商品企画と流通 蝶理株式会社 浅山俊幸 ③テクニカル 日本繊維技術センター 広瀬淳 ④品質管理 (司会)相模女大 永井房子 フォーラムⅡ「被服構成学における教材研究とカリキュラム」 ①衣料の供給体制と被服構成学 共立女大 間壁治子 ②新しい被服製作実習への試み 大妻女大 高部啓子 ③CGデザイン実習 青葉学園短大 芦澤昌子 ④企業ニーズと教材内容 福岡女大 山本昭子 (司会)信州大 林隆子 講演「環境問題と消費者」 消費者教育支援センター 中原秀樹</p>	<p>共同研究報告 ①「乳幼児衣料の表示について」 文化女大 三吉満智子 ②「成人衣料+サイズ表示について」 京都女大 山名信子</p>	<p>畑宿寄本会館 成川美術館</p>
<p>平成4年 8月18・19・20日 岐阜グランドホテル 東海学園女短大 辻 啓子</p>		<p>講演「地球環境時代の熱的快適性と被服の関係について」 椋山学園大 大野秀夫 講演「コンピュータは教育を救えるか-被服教育へのアプローチ-」 岐阜大 杉原利治 講演「高齢者の生活と被服」 特養サンビレッジ新苑 石原美智子 公開座談会「新しい被服構成学を求めよう」 (コメントーター)大妻女大 松山啓子 (パネリスト)共立女短大 綾田雅子/聖徳大 大塚美智子/静岡大 大村知子/京都文教短大 銭谷八栄子</p>	<p>報告「乳幼児衣料の表示に関する調査ならびに試買テスト の研究結果」 文化女大 三吉満智子</p>	<p>メルボ紳士服株式会社 滋賀工場 東海サーモ株式会社 (志地)</p>
<p>平成5年 7月29・30・31日 南海サウスタワーホテル 大阪 ノートルダム女大 栢田庸</p>		<p>講演「服装の色と心理」 京都工芸繊維大 秋田宗平 パネルディスカッション 「いま、被服構成学教育の志向するところ」 広島大 鈴木明子/愛知淑徳短大 土田正子/大妻女大(非) 布 施谷節子</p>	<p>「肥り、痩せについての被服構成学的研究」 大妻女大 植竹桃子 「被服の着装評価にかかわる色彩とデザインの研究」 名古屋女大 石原久代 「縫目の外観性能に関する研究」 奈良佐保女学院短大 山田洋子</p>	<p>国立文楽劇場講演「文楽 と衣裳」衣裳部 石橋修人 形遣い 桐竹一暢 文楽鑑賞「夏祭良華鑑」</p>

平成6年 7月29・30日 オンワード総合研究所 相模女子 永井房子	オンワード総合研究所 デザイン・パターン・システム 部、テキスタイル資料室、 品質管理部	講演とデモ「家政学データーベースとソーシャルについて」 香川大 鎌田佳伸/学術情報センター 木村 優 提言「被服構成学研究への姿勢」 相山女学園大 中保淑子/新潟大(非) 平沢和子/神戸女大 増田茅子 講演「アパレル産業における企画・設計・製造の現状と今後」 (株)オンワード樫山 小倉万寿男	シンポジウム①高齢化と衣服 (コーデイナーター)青葉学園短大 芦澤昌子 (パネリスト)昭和女大 猪又美栄子/東海学園女短大 辻啓子/福岡女大 山本昭子 ②「被服構成学教育の試み」をめぐって (コーデイナーター)大妻女大 高部啓子	オンワード総合研究所
平成7年度	日本家政学会被服学関係 部会企画シンポジウム 「高齢者・障害者の衣服を考える」 ①高齢者・障害者の衣服を創る 横浜国際福祉専門学校 小澤洋子 ②肌着の快適性を考える グンゼ株式会社 成見健史 ③高齢者・障害者の衣服素材を考える 文化女大 林田隆夫	部会企画シンポジウム 「高齢者・障害者の衣服を考える」 ①高齢者・障害者の衣服を創る 横浜国際福祉専門学校 小澤洋子 ②肌着の快適性を考える グンゼ株式会社 成見健史 ③高齢者・障害者の衣服素材を考える 文化女大 林田隆夫	シンポジウム①高齢化と衣服 (コーデイナーター)青葉学園短大 芦澤昌子 (パネリスト)昭和女大 猪又美栄子/東海学園女短大 辻啓子/福岡女大 山本昭子 ②「被服構成学教育の試み」をめぐって (コーデイナーター)大妻女大 高部啓子	オンワード総合研究所
平成8年 7月30・31日8月1日 広島国際会議場 広島大 古田幸子	話題提供 ①男文化と女文化のシンボルとしての衣服と自動車 (株)マツダ産業 福田成徳 クワレ繊維 山口新司 ②被服の新素材とその開発 創作屋服飾研究所 佐々木雄大 ③アパレルメーカーの過去・現在・未来 シンポジウム「被服構成学の研究・教育と社会への貢献」 ノートルダム女大 栢田庸/東京学芸大 鳴海多恵子/文化女大 筋野淑子	話題提供 ①男文化と女文化のシンボルとしての衣服と自動車 (株)マツダ産業 福田成徳 クワレ繊維 山口新司 ②被服の新素材とその開発 創作屋服飾研究所 佐々木雄大 ③アパレルメーカーの過去・現在・未来 シンポジウム「被服構成学の研究・教育と社会への貢献」 ノートルダム女大 栢田庸/東京学芸大 鳴海多恵子/文化女大 筋野淑子	シンポジウム①高齢化と衣服 (コーデイナーター)青葉学園短大 芦澤昌子 (パネリスト)昭和女大 猪又美栄子/東海学園女短大 辻啓子/福岡女大 山本昭子 ②「被服構成学教育の試み」をめぐって (コーデイナーター)大妻女大 高部啓子	オンワード総合研究所
平成9年 8月28日 京都テルサ 京都女大 福井弥生	(夏期セミナー)に引き続き、 公開講座開催)	(夏期セミナー)に引き続き、 公開講座開催)	「若年成人女子の体型特性について」 共立女大 別府美雪 「幼児靴設計のための形態計測」 東京家政大(非) 土肥麻佐子 「スカート設計に関する一考察」 福井大 服部由美子	オンワード総合研究所
平成10年 8月27・28日 アルカディア市ヶ谷 大妻女大 高部啓子	アパレル商品から被服を考 える (夏期セミナー)に引き続き、 公開講座開催)	アパレル商品から被服を考 える (夏期セミナー)に引き続き、 公開講座開催)	これからの被服構成学へのメッセージ 元部会長 祖父江茂登子 増田茅子 古松弥生 木岡悦子	オンワード総合研究所

平成11年度	第1回海外研修のため夏期セミナーは休止				
平成12年 8月24・25日 大妻女子大学 静岡大 大村知子	「被服構成学の研究・教育に活かすプレゼンテーション技術」 ーデジタル時代に対応してー	講義「POWER POINTでできること」 大妻女大 伊平保夫 プレゼンテーション技術「POWER POINT」の操作講習			
平成13年度	日本家政学会被服学関係部会合同夏セミナー(8月27～29日、東レ総合研修センター)のため部会セミナーは休止	部会企画シンポジウム 「新しい被服構成学教育をさぐる」 (コーディネーター)京大女大 畠山絹江/京大府立大 泉加代子 (パネラー)福島大 千葉桂子/青葉学園短大 芦澤昌子/大阪樟蔭女大 小田明美/相山女学園大 富田明美			
平成14年8月28・29日 アルカディア市ヶ谷 青葉学園短大 芦澤昌子	被服構成学は福祉社会にどのように貢献していくか	講演「衣服と身体の動きの密接な関係」 昭和大 藤が丘リハビリテーション病院 山口光國 講演「身体の機能障害と衣服との関係について」 (財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 岩波君代 講演「高齢者・障害者用商品の開発」 (株)ワコール人間科学研究所 藤井孝子 講演「福祉衣料研究会からユニバーサルウェアまで」 (財)日本ユニフォームセンター 田川香津子	「高齢女性の体つきと衣服設計」 大妻女大 渡邊敬子 「運動機能に障害がある人の衣生活の現状と課題」 東京学芸大(院) 雙田珠己 「障害児の衣服の着脱とリフォームについて」 福島大 千葉桂子		
平成15年度	日本家政学会被服学関係部会合同夏セミナー(8月26・27日、実践女大)のため部会セミナーは休止	部会企画 「被服構成学に関連する新しい情報技術を用いた機器やソフトのオペレート体験」 動作解析ソフト/自動刺繍マシン/i-Designerシリーズシステム			
平成16年 8月30・31日 昭和女子大学 昭和女大 猪又美栄子	「新 人体計測考」 ユニバーサルデザインの見点から ～ここが必要、 そこが知りたい～	講演「水まわりのユニバーサルデザインへの取り組み」 TOTOユニバーサルデザイン研究所 竜口隆三 講演「衣服のユニバーサルデザイン」 (株)吉田ヒロミデザインインターナショナル 吉田ヒロミ	シンポジウム「身体状況に応じた計測」 (コーディネーター)相山女学園大 富田明美 和洋女大 布 施谷節子 京大女短大 渡邊敬子 山野美奈芸術短大 渡辺聡子 東京家政学院大 川上梅 京大女大 岡部和代	人体計測実習	
平成17年度	第3回海外研修旅行のため夏期セミナーは休止				
平成18年 8月22・23日 東京家政大学 東京家政大 雲田直子	被服構成学の研究・教育に活かすプレゼンテーション技術Part II ー動画を教材に 取り入れようー	動画素材を用いたプレゼンテーション技術の講習 Windowsムービーメーカー、Flashなど動画編集ソフトを使って	「動作を動画で」 昭和女大 猪又美栄子 「衣生活を支える被服学」 横浜国立大 薩本弥生 「公開講座道具の観点からのプレゼンテーションシステム」 東京学芸大 鳴海多恵子 「Flash MXによる着物の裁ち方ムービー」 東京家政大 田中早苗		

平成19年 8月27・28日 神戸ファッション美術館 神戸女大教育センター 京都女大 岡部和代	ファッションの魅力	講演「宝塚歌劇団の舞台衣装のデザイン」 宝塚歌劇団衣装デザイナー 任田幾英	「紙衣の研究－和紙を材料とした衣服制作について－」 大阪樟蔭女大 定延久美子 「新しい美の創造－芸術が生み出した衣服－」 滋賀県立大 森下あおい	神戸ファッション美術館マ リーアントワネット生誕250 年記念特別展示18世紀麗 しのロココ衣装展
平成20年 8月25・26日 日本女子大学 東京家政学院大 川上 梅	工業製品としての衣服 －先端研究からアパレル の現場まで－	講演「かたち・動き・変形を再現する」 デジタルヒューマン研究センター 副センター長 持丸正明 パネルディスカッション 「アパレル現場のサイズとデザイン」 (コーディネーター) 日本女大 大塚美智子 (パネリスト) 東京家政学院大 川上梅/(株)オンワード樫山 川島 寿子 /(株)ユニクロ 小瀧裕美子/実践女大 高部啓子		産業技術総合研究所デジ タルヒューマン研究セン ター

(敬称略 氏名・所属は当時)



表4 談話会・研究例会

日時・会場	内 容	見 学etc.
昭和59年2月20日 教育会館	被服構成学の展望	
昭和60年2月16日	被服構成学の研究と教育-被服構成実習指導の現状と課題-	
昭和60年12月14日 甲南女子大学	被服の設計・製作に優れた技術を持つ専門家に聞く 関本正子氏(S. A. ジバンシー)を囲んで	
昭和61年10月4日 文化女子大学	小・中・高校の家庭科教育における被服教育の位置づけ	
昭和63年1月30日 文化女子大学	被服を考える旅-西ドイツを中心として- 実践女大 飯塚幸子	
平成元年1月14日 京都女子大学	1 衣料に関する消費者問題について K.K.消費科学研究所 川嶋慶三 2 消費者問題調査内容について 被服構成学協会消費者問題委員	
平成2年3月3日 京都女子大学	1 消費者問題研究のアンケート報告 2 大学設置基準による被服構成学の名称問題に関する経過報告 3 被服構成学の今後の課題-学科目として被服構成学の内容の検討-	
平成2年12月21日 文化女子大学	講演 1 「乳児の発育について」 昭和大 滝田誠司 2 「育児スタイルの変化と現状」 主婦の友社 相場静子 3 「ベビーウェアの現状」 ベビーライフコーディネーター 石崎景子	
平成4年2月29日 文化女子大学	講演 1 「アメリカ・ヨーロッパに”生活環境学”を訪ねて」 大妻女大 松山容子 2 「パリ→横浜を結ぶファッション・ファクトリー・ブティックの試み」 K. K. レナウン 徳永幹治 報告「乳幼児衣料の表示にかかわる諸問題」に関する研究の進捗状況と 中間報告 部会長・副部会長	
平成4年12月19日 静岡県総合社会福祉 会館	講演 1 「染色作家芹沢銈介の作品とコレクション」 静岡市立芹沢銈介美術館 学芸員 勝間田昌子 2 「大学における教育評価と教授法」 静岡大 山崎準二 話題提供 「被服構成学実習への一つの試み」 椛山女学園大 富田明美/静岡大 大村知子	静岡市立芹沢銈介美術館
平成5年11月20日 甲南女子大学	講演 1 被服の造形と表現 甲南女子大学における実践例 SHOW “Kobe, today and past” 甲南女大 木岡悦子 2 「因子分析による質問項目作成のプロセス」 甲南女大(非) 藤島寛 話題提供「続 いま被服構成学教育・研究の志向するところ」 1 短期大学におけるアパレル造形実習の試み 京都女大 畠山絹江 2 衣服による長時間拘束の人体への影響 昭和大 加藤理子	
平成7年3月4日 共立女子大学	講演 1 「投稿論文のまとめ方」-学会誌編集の経験から- 筑波大 岡田守彦 2 「美しい創造と装い」 文化女大 三吉満智子	
平成7年12月16日 大妻女子大学	講演 1 「服づくりとデザイナーの個性」 ファッションデザイナー 吉田ヒロミ 2 「21世紀の百貨店とバイヤーの役割」 東武百貨店 浅川邦子 研究事例報告 1 「クラスター分析による腰部体型のパターン分析」 日本女大 恒川久子 2 「布の材質の感性効果とワンピースドレスのシルエットへの適合認知との関係」 京都府立大女短大 泉加代子	

平成8年11月30日 椋山女学園大学 この年度より「研究例会」と改めた	テーマ「家庭科一被服学教育の方向性を求めて」 基調講演「第15期中央教育審議会”審議のまとめ”を受けて」 滋賀大 櫻井純子 話題提供 ・中部地区「技術・家庭科」実態調査報告 愛知淑徳短大 土田正子 ・現場における教育状況と問題点ー小学校ー 名古屋市立如意小 岡部よし江 ・現場における教育状況と問題点ー中学校ー 名古屋市立大森中 細田直子 ・現場における教育状況と問題点ー高等学校ー 長野県丸子実業高 和田由紀子 ・家庭科一被服学教育の一貫性 中京女大 長坂ふじ子	
平成9年11月22日 竹田嘉兵衛商店	テーマ「有松絞り”伝統技術に学ぶ”ー新しい造形を目指してー」 講演 「有松絞りー過去・現在・未来」 K. K. 竹田嘉兵衛商店 竹田浩巳	名古屋市指定有形文化財 竹田邸 久野絞染工場 (デザイナーズテキスタイル) 絞り会館旧東海道家並
平成10年5月30日 日本女子大学	テーマ「米国における被服教育について」 講演 バージニア州立バージニア工科大学のアパレルデザインのパログラム バージニア工科大学 キャサリン・サーニ/ジョアン・ブオレス	
平成11年10月15・16日 サンピア福山、自重堂	講演 「スキージャンプV字飛行の時代とウェアの機能性」 広島大 渡部和彦 事例報告 「被服による拘束と動作性」 甲南女大 森由紀 「計測対象集団または計測条件が異なる場合の身体計測データのデモンストレーション」 「和服縫製用特殊ミンについて」 (株)ラポージェ 堀田善行	メンズユニフォーム自重堂
平成12年12月9日 文化女子大学	講演 「新素材のファッション性と造形性」 東レ繊維マーケティング部 太田義一	
平成13年12月1日 京都女子大学	講演 「花洛のモードー寛文小袖と東福門院ー」 関西学院大 河上繁樹 事例報告 「視覚障害者の衣生活におけるバリアについて」 静岡大(研) 春日綾 「女子学生の身体意識と他者評価との関連について」 名古屋女大 原田妙子	
平成14年11月30日 椋山女学園大学	講演 「衣と医のかかわりと福祉のこころ」 愛知県心身障害者コロニー 篠田達明 事例報告 「離職と介護と勉学、そして社会貢献」 日本聴能言語福祉学院 柴田美紀子 「肢体不自由な女性の衣服の購入と衣生活」 埼玉大 川端博子	
平成15年12月6日 京都女子大学	講演 「シルクロードの民族衣装と染織」 染織研究家 名和野要 事例報告 「アパレルCAD教育のための授業モデルとその教材開発」 和洋女大 山本高美 「ニット素材による浴衣の試作とその着心地」 京都市立吉祥院小 渡辺明日香	「西陣意匠紋紙工業協同組合」「井筒風俗博物館」
平成16年12月11日 福井大学	講演 1 「色を音で伝える器具、カラートークの紹介」 福井大 上田正紘 2 「高齢者・福祉衣料の製品化研究と服飾資材の開発事例」 福井県工業技術センター 黒川和男 3 「眼鏡の企画、デザインについて」 (株)オナガメガネ 小永幹夫	
平成17年10月30日 日本女子大学	講演 1 「日本のアパレルの現状」 (株)ノイバンシュタイン 斉藤敬子 2 「ヨーロッパのオートクチュールとプレタポルテの現状」 クチュール・アイ 滝澤愛 事例紹介 生活安全保障セミナー「高齢者の生活をサポートするファッション」 の報告 日本女大 大塚美智子 [総会開催]	
平成18年12月9日 文化女子大学	ギャラリートーク 文化服飾博物館学芸員 吉村紅花 講演 「男のシャツ」 デザイナー 嶋崎隆一郎	文化学園服飾博物館 「おとこのおしゃれ」 世界の男性衣装に見る美意識

(敬称略 氏名・所属は当時)

表5 公開講座

開催年月日 実行委員長	会場	テーマ	内容	講師
平成9年8月29日 京都女大 福井 弥生	京都テルサ (夏期セミナーに引き続 き開催)	いま！教育現場(被服)が求めているもの・・・に応 えて 一部会員による研究成果の家庭科教育への選 元一	基調講演「いま！被服教育に求められるもの」 テーマ別講座—着る— ①「豊かな感性を育てる教育の試み」 ②「衣生活に関する情報受容と着装行動の世代差・男女差」 テーマ別講座—作る— ①「アパレルを工業製品として捉える」 ②「アパレル技術者養成の立場から」 テーマ別講座—活用する— ①「幼児・成人・高齢者のボタンかけ動作を例に」 ②「積極的な生活態度をもっていきいきと生きるための衣生活 —豊かな高齢社会の創造をめざして—」	甲南女大 木岡悦子 (司会) 相模女大 永井房子 倉敷市立短大 稲垣和子 静岡大 大村知子 (司会) 三重大 増田智恵 大妻女大 松山容子 倉敷市立短大 鈴木明子 (司会) 広島大 吉田幸子 昭和女大 猪又美菜子 十文字学園女短大 古松敦生
平成10年8月28日 大妻女大 高部 啓子	アルカディア市ヶ谷 (夏期セミナーに引き続 き開催)	高齢者と衣服	テーマ別研究報告 ①「高齢者と体型」 ②「高齢者と着装」 ③「高齢者と既製服」 高校における授業実践報告 「おしやれなシニルパーフアッション」	相山女学園大 中保淑子 文教大 伊地知美知子 川村短大 田中美智 都立教育研究所 高橋ヨシ子 都立向島商業高 増田智佳子 都立忠生高 高橋和子 都立深沢高 志村純美 元広島大 林隆子 (コーディネート) 静岡大 大村知子 福井大 服部由美子 東京学芸大 鳴海多恵子 文化女大 佐藤真知子 大妻女大 金谷喜子
平成16年3月26日 静岡大 大村 知子	アルカディア市ヶ谷	楽しさと感動を呼び起こす布を使ったものづくり 平成15年度文部科学省科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) 研究成果公開発表(B)による公開講座	基調講演「布と糸と針によるものづくり」 シンポジウム ①「素材の観点から」 ②「道具の観点から」 ③「技術の観点から」 ④「製作法の観点から」 ワークショップ ①布を立体化する「ハンダナを使った種輪ルックのスカート作り」 ②布を装飾する「ニードルハンチを使ったテキスタイル作り」 ③布をつなぐ「ヨーキルトを使ったニューレトロなパッチワーク」 デモンストレーション ①布を立体化する「ピンワーク」 ②布を装飾する「ブリーツ加工」 ③布をつなぐ「ニットソーイング」	相模女大 田中百子 大妻女大 金谷喜子 東京家政大 雲田直子 元広島大 林隆子 相山女学園大 富田明美 福井大 服部由美子 東京学芸大 鳴海多恵子 文化女大 佐藤真知子 大妻女大 金谷喜子
平成17年3月24日 相山女学園大 富田 明美	ウィル愛知	布と糸と針を使った楽しいものづくり —創造性の育成— 平成16年度文部科学省科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) 研究成果公開発表(B)による公開講座	基調講演「布と糸と針によるものづくり」 シンポジウム「ものづくりの要素と最新の動向」コーディネート ①「素材の要素から」 ②「道具の要素から」 ③「技術の要素から」 ④「製作法の要素から」 ワークショップ「たのしいものづくり」 ①布を立体化する「種輪ルックのスカート作り」 ②布を装飾する「ニードルハンチを使ったテキスタイル作り」 ③布をつなぐ「ヨーキルトを使ったニューレトロなパッチワーク」 デモンストレーション「創造性の啓発」 ①針を使って布を立体化する「ピンワーク」 ②糸とアイロンを使って布を装飾する「ブリーツ加工」 ③ミシンを使って布をつなぐ「ニットソーイング」 展示「布と糸と針が創り出すデザイン」	相模女大 田中百子 大妻女大 金谷喜子 名古屋学芸大 白石孝子 和洋女大 布施谷節子 文化女大 渡部旬子・磯崎明美 川村短大 高橋裕子

<p>平成18年3月25日</p> <p>京都女大 泉 加代子</p>	<p>広島市まちづくり市民 交流プラザ</p>	<p>布と糸と針が拓く未来 -楽しいものづくり,創造性育成と技の伝承-</p> <p>平成17年度文部科学省科学研究費補助金 (研究成果公開促進進費) 研究成果公開発表(B)による公開講座</p>	<p>基調講演「布と糸と針によるものづくり」 シンポジウム「ものづくりの要素と最新の動向」</p> <p>①「素材の要素から」 ②「道具の要素から」 ③「技術の要素から」 ④「製作法の要素から」 ワークショップ「たのしいものづくり」</p> <p>①布を立体化する「踵輪ロックのスカート作り」 ②布を装飾する「ニードルパンチを使ったテキスタイル作り」 ③布をつなぐ「ヨークキルトを使ったニューレトコパッチワーク」 デモンストレーション「創造性の啓蒙」</p> <p>①針を使って布を立体化する「ピンワーク」 ②糸を使って布を装飾する「絞り」 ③ミシンを使って布をつなぐ「ニットソーイング」 展示「布と糸と針が創り出すデザイン」</p> <p>シンポジウム「人の体と着心地の良い服」</p> <p>①衣服サイズ選択の問題 ②衣服の動作適応性 ③障害者と衣服</p> <p>シンポジウム②「心を元気にする衣服」(コーディネーター)</p> <p>①高齢者の装いの効果 ②衣服の色彩の効果 ③装いは生きる喜び-障害者の立場から- 展示とワークショップ</p> <p>①衣服圧体験 ②若返り、生き生き シニアファッションショーの上映と解説 ③安心・安全な衣服の展示とアドバイス ④適合サイズ探し</p> <p>実践女大 高部啓子 京都女大 泉加代子 東京家政大 雲田直子 東京学芸大 鳴海多恵子 文化女大 佐藤真知子 大阪夕陽丘学園短大 林仁美</p> <p>和洋女大 布施谷節子 文化女大 磯崎明美 甲南女大 森由紀</p> <p>相模女大 田中百子 三重短大 村田温子 名古屋学芸大 白石孝子</p>
<p>平成20年3月21日</p> <p>和洋女大 布施谷 節子</p>	<p>和洋女子大学</p>	<p>生活を豊かにする衣服 -着心地の良い快適な衣服を求めるとのこ-</p>	<p>(コーディネーター) 昭和女大 猪又美栄子 静岡女大 大村知子 昭和女大 石垣理子 熊本大 雙田珠己 相山女学園大 富田明美 京都女大 泉加代子 日本女大 芦澤昌子 山本邦明</p> <p>和洋女大 嶋根歌子・横浜国立大 藤本弥生 京都女大 泉加代子 日本女大 大塚美智子 静岡女大 大村知子・お茶の水女大(院) 平林優子</p> <p>(コーディネーター) 和洋女大 布施谷節子 日本女大 大塚美智子 昭和女大 石垣理子 神戸女大大学院 井上真理 京都女大 泉加代子</p> <p>甲南女大名誉教授 木岡悦子 和洋女子大(非) 平林優子 京都女大 岡部和代 日本女大 大塚美智子 京都女大 泉加代子 (所属・お名前は当時)</p>
<p>平成21年3月21日</p> <p>甲南女大 森 由紀</p>	<p>キャンパスプラザ京都</p>	<p>生活を高める衣服 -健康で自立的な高齢期を過ごすために-</p> <p>平成20年度文部科学省科学研究費補助金 (研究成果公開促進進費) 研究成果公開発表(B)による公開講座</p>	<p>シンポジウム「超高齢社会に衣服はどう貢献するのか」</p> <p>①体型を配慮した衣服-快適性向上のための体型フィットデザイン- ②運動機能に適合した衣服-形や着方による動きやすさの違い- ③安全・安心な衣服-着心地・健康と高機能テキスタイル- ④心を元気にする衣服-ファッションセラピーの効果- ポスター発表</p> <p>基調講演「生活の質を高める衣服-おしゃべりに生きる-」 展示とワークショップ</p> <p>①適合サイズ探し ②衣服圧体験 ③ユニバーサルデザイン衣服の展示とアドバイス ④生き生きシニア・ファッションショーのビデオ上映と解説</p>

国際交流 被服構成学部会企画の海外研修

元広島大学 林 隆子

部会が初めての海外研修旅行を実施して早くも10年が過ぎました。研修旅行を企画したきっかけは、1987～88年に私が在外研修でロードアイランド州立大学に6ヶ月間滞在した折、何度かボストンとその近郊を訪れ、織物の生産地として栄えた工場等を博物館として保存しているのを見て、部会の方々と訪れたいと思ったことにあります。幸いにも平成11年度部会事業計画に入れていただき、アメリカ東部の旅行が実施されました。永井房子実行委員長をはじめ猪又美栄子・雲田直子・高部啓子・田中美智・日野伊久子各先生が委員として協力してくださいました。32名の参加があり、多くの人の協力のもとに無事終了し、好評でした。若い方々の参加を促すため費用をできるだけ安くしたいと思い、昭和女子大学ボストン校のご協力で学生寮に4泊させていただき、そこを拠点にしてニューイングランド地方の古きアメリカ・良きアメリカを尋ねました。ニューヨークではアパレル界の人材育成の中心であるF.I.Tとメトロポリタン美術館のコスチューム・インスティテュートの収蔵庫および日本美術品の修復部門など一般ではなかなか見学出来ないところも訪れました。この研修の詳細は、家政誌 Vol. 51, No 4, 349～350にまとめて報告してあります。

第2回は、ニューヨークから南への旅とこの年に限って3ヶ月早い8月に開催されたITAAの大会に参加することでした。すなわち、前回の研修が、アメリカの過去の織物産地を主に訪ねたのに対して、現在の繊維産業の中心ともいえるノースカロライナを訪れること、そしてITAAは、最近大学人に強く求められている海外の学会に参加・発表することを踏まえ、わが分野で参加でき

る有力な専門学会の1つではないかとの思いで組み入れました。しかし、2001年9月11日の忘れられないあのニューヨークの惨事の約1年後で治安に不安があったこと、学会参加を目的としたことで二の足を踏む方が多かったのか参加者は少なく、高部啓子部長兼実行委員長以下16名でした。アメリカの研究の先端に行くノースカロライナ州立大学繊維学部やTC²など被服関係の研究施設の見学に加えて、ニューヨークからワシントンへの途中ではデュポンの発祥の地も訪れました。

第3回目は、フランス・イタリアへの旅で、田中美智実行委員長のもとで実施されました。リヨン・パリの8日間とミラノ・フィレンツェを加えた12日間の2コースを設定し、部会員がそれぞれの都合に合わせて参加することが出来ました。詳細等は、部会誌26・27号に掲載されています。

1・2回目の研修旅行は、アメリカにおける新旧の被服産業の拠点ともいえるところを尋ね、また被服学の今後の方向を考えるために参考となる研究所等を訪れました。それと同時に我々はアメリカが植民地時代に綿を南部で栽培し、北部で織物に加工しイギリスに運んだという歴史的な足跡を辿ったことになりました。また、3回目は「2000年の時空を超える服飾文化を求めて」というタイトルのように被服以外でも様々な歴史的文化に触れることが出来、近代産業の発展過程を体感したアメリカとは異なった感慨を我々に与えました。

海外研修は、時間的・環境的制約で参加人数が限られた中、部会の皆さんの理解と協力の下に実施されたと感謝しています。一般の海外旅行では得られない部会の特質を生かす計画であったかどうか…。そうであったことを願っています。

国際交流

ITAA, 韓国衣類学会, IFHE, ARAHE

実践女子大学 高部 啓子

部会発足 30 年を記念して、日本家政学会や当部会が関わりを進めている国際学会について記してみたい。

ITAA は、International Textile and Apparel Association の略で、アメリカを中心とした被服学に関する国際学会である。アメリカの被服学の大学教員でつくられた ATAA が母体であり、本年 65 年目の年次大会が開催される。テキスタイル科学、テキスタイルデザイン、社会心理学的文化、ビジネス、アパレルデザイン・構成、繊維アパレル産業、服装史、繊維経済・消費といった研究分野が対象となっている。年次大会時には学会賞やさまざまな賞の授与とともに作品コンテスト、ファッションショーなども開かれ、被服構成学部会に近い内容の学会である。この学会には 1991 年頃に、日本から十数名の先生方がツアーを組んで参加され日本の被服学教育について発表されている。また当部会の 2000 年の海外研修でも参加し、研究発表したことがある。通常 10 月末～11 月初めに年次大会が開かれるため参加しにくい。ここ数年日本からは一桁の参加であるが、韓国からは多いときには 60 名近くが参加しており積極的である。

韓国衣類学会からの呼びかけに日本家政学会の中の被服学関連部会連絡会が応じて、2005 年 8 月に、共同主催の「2005 Seoul International Clothing & Textiles Conference」を、韓国ソウル市で開催した。U.S.A, 中国, タイ, フィリピン, カナダからの参加もあり総勢 427 名(日本からの参加 100 名)の大会となった。日本からの発表は、全体講演 1 件、スペシャルトピックス 2 件、研究発表 41 件で、当部会からも多くの発表があった。韓国衣類学会はこの 2～3 年前に ITAA との Joint

Conference を開始しており、国際交流が盛んである。

IFHE (International Federation for Home Economics) は 1908 年にスイスのフリボーグで誕生し、2008 年に創立 100 周年を迎えた国際家政学会である。4 年に 1 回世界大会が、2 年ごとに評議会、毎年理事会が開催されている。当学会は、2007 年公式発表で、団体会員 114 団体、個人会員 1258 名、学生会員 93 名の組織となっており、日本人会員は、団体会員 4、個人会員 309 名、学生会員 21 名であり、個人会員全体の約 1/4 を占めている。大会時の発表分野は、消費者、環境、被服、家庭経営、家族、健康、食物、教育、理論・方法・哲学分野と家政学全般にわたっているが、被服学関係の発表は比較的少ない。スイス大会で作品の展示が初めて可能となり本部会員も発表した。研究発表については家政学という視点が強調される。部会会員の参加は年々増加の傾向にある。

ARAHE (Asian Regional Association for Home Economics) は、1983 年日本家政学会が中心となってできた組織で IFHE の下部組織となっている。アジア地区を中心とし、2 年ごとに大会が開かれる。現在、日本の澤井セイ子氏が会長であり、事務局が日本におかれている。発表分野は IFHE に準ずる。2009 年には創設 25 周年を記念して第 15 回大会がインドのプネで開催される。新しい試みとして国際間の共同研究を進めるセッションがもたれる。国際的活動を始められるよい機会になると思う。また実行委員長が被服学研究者なので、大学セミナー、見学など被服学に関わる内容がいつもより多い傾向にある。

部会員のさらなる積極的国際活動を祈念する。

社会との連携 ものづくり研究公開講座

静岡大学 大村 知子

既製服時代を支える生産活動が次々に海外に移され、和服の仕立てや日本刺繍も途上国に依存している。生産業の空洞化が、わが国が長年培ってきたものづくりの優れた技術やノウハウまでも失わせてしまう危機にさらしている。日常生活の中でのものづくりを体験する機会が非常に少なく、ものづくりの知識・技能の不足のみならず、創造力、先を見通す力、知識を知恵として発展・応用する力など基本的な、課題解決能力が育っていない若者や子どもたちを多く見受ける。

家庭科教育においては、時間数に限りあるなかで、家庭科の教員自身も被服製作の経験が乏しく、製作実習を行うことが減っている。中学の技術・家庭科では被服領域は選択となり、衣生活に関する学習をほとんどしないで卒業するケースも多く、針に糸を通せない、ボタンが取れた衣服は廃棄するなどの行動がみられる。

このような時代にあって、布と糸と針を使ったものづくり教育の意義は、単に被服が自分で作れるようになるということではなく、ものを作り出すプロセスにおいて、忍耐力、自己表現力、主体性などを育み、自己コントロール力を高め、創造性、先を見通す力、手指の巧緻性などの多くの基本的な能力を育成することにある。自分の手を使ってものを作り上げた達成感は、自己肯定感を高めるものであり、「生きる力」を育成する。

長い間、被服づくりの知識・技能の多くが家庭で伝承されてきたが、現在では、家庭の教育力も極めて低下しており、あわせて地域の教育力（地域で生産活動を見聞・体験したり手伝ったりしての技の伝承）もほとんど期待できない。

被服構成学部会は、文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費研究成果公开发表（B）が平成 15, 16, 17 年度の 3 年間採択され、公開講座「楽しさと感動を呼び起こす布を使ったものづくり」を実施した。平成 16 年 3 月には東京市ヶ谷（実行委員長：大村知子）、平成 17 年 3 月に名古屋（実行委員長：富田明美）、平成 18 年 3 月に広島市（実行委員長：泉加代子）において、高校生向けに開催し、毎回 100 名をこえる参加者があった。

基調講演では繊維を紡いで糸にし、それを織ったり編んだりして丈夫でしなやかな布を作り出した先人の智恵と技術、何千年もの間、衣服素材として使われている布の扱い方の技術に関する科学的な裏づけを知らせた。シンポジウムでは、創造的ものづくりの提案、最新の技術や器機について啓発し、ワークショップでは、実際に布と糸をつかったものづくりの楽しさを体験させ、技の伝承と創造への興味を喚起することを目指した。内容はアカデミックかつ高校生にもわかりやすく、ワークショップとデモンストレーションは「そうだったのか・・・」「わかった！」「できた！」「面白いな～」「スゴイ・・・」と言われるように、そして「楽しかった!!」との感動体験を目指した。被服構成学部会員の力とアイデアを結集し、ものづくりの題材にも部会員の研究の裏づけに基づく教育実践とその蓄積、多様な創意工夫が披露され、部会員間の情報交換にもなった。公開講座からは、被服構成学部会が今後さらに社会と連携しながら積極的に次世代育成に寄与していくことの意義が大きいという確かな手応えを得た。

社会との連携

「全国中学生創造ものづくり教育フェア」への後援・協賛

東京学芸大学 鳴海 多恵子

近年の学生の被服製作に関する知識・技能低下の著しさには嘆息すら覚えることがある。「縫い代」「三つ折り」「チャコペーパー」など一昔前なら小学校で習得する用語や技能が定着していないのである。衣生活の変化、もの作りの体験不足ということだけでなく、現行の学習指導要領が、中学校で被服製作が選択内容であること、高校の教科「家庭基礎」において、被服製作が含まれていないこと、また、「家庭総合」においても、学習指導要領には被服製作が含まれているにも関わらず、実態としては「基礎縫い」「エプロン」「刺し子のコースター」が製作教材の中心となっていること（平成20年度全国家庭科教育協会調査報告）が要因であろう。このような状況のなかで、全日本中学校技術・家庭科研究会が主催する「全国中学生創造ものづくりフェア ―とっておきのアイデアハーフパンツコンテスト―」において、図1に示すような創意工夫が盛り込まれたハーフパンツを、中学生が3時間半で縫い上げてしまう様子を見られることは、子どもたちが本来持っている能力の可能性を改めて認識し、被服構成学を専門とする我々を力づけてくれるものである。

このコンテストは、中学生が競技会や作品展を通して「ものづくり学習」の成果を発表し、表彰



図1 平成20年度被服構成学会賞授業作品（岐阜県 森野美香さん）人を楽しくさせるピエロをイメージした作品

されることにより、ものづくりの喜びを体験し、関心意欲を高めること、「ものづくり教育」の充実と発展、社会への理解・啓発を図ることを趣旨として毎年、開催されているものである。本学会はその趣旨に賛同し、「とっておきのアイデアハーフパンツコンテスト」が平成14年から開始されるにあたり、準備段階から参加し、中学校の家庭科の先生方と審査題材、審査基準、審査方法などについて検討を重ねてきた。現在は審査員長という立場で審査の中心的役割を担っている。



審査は作品が完成するまでの作業全般の技能、および作品の着装、事前に提出されたレポートが対象となっている。出場者は各地区の予選を勝ち抜いた優秀な生徒たちであり、その背景には指導された先生の地道な指導が感じられるが、年ごとに縫製技術の基礎基本が崩れてきている傾向が見られる。この競技会への支援は参加する子どもたちへの応援とともに、本学会がこれまでに積み重ねた研究・指導実績を活かし、専門的な立場から被服構成に関する科学性に基づく知識・技能の啓蒙の機会としても意義ある活動である。

学校教育での被服製作の指導が困難な現状の中で、この競技会参加者から未来の被服構成学の専門家が誕生することを期待したい。

社会との連携 研究公開講座

和洋女子大学 布施谷 節子

平成 19 年度の公開講座「生活を豊かにする衣服―着心地の良い快適な衣服を求めるために―」の実行委員長を仰せつかり、平成 20 年 3 月 21 日に和洋女子大学で開催いたしました。

最近では、被服構成学の分野で、高齢者を対象とした研究が進められており、障害者を対象とした研究も緒に着いた観があります。それらの研究成果は学会で発表されたり、学会誌に掲載されたりしておりますから、その意味では構成学の研究成果が社会に公開されているといえるでしょうが、これらを見聞きするのは一部の限られた人たちになってしまうという欠点があります。存在意義を広く社会に公開し、研究成果を社会に還元することは、構成学のみならず、どの研究分野でも求められていることだと考えます。

平成 19 年度の公開講座の対象は中高年とし、健常者に留まらず、障害者も対象としました。公開講座ではいつも参加者集めに苦労いたします。特に、一般の中高年や障害者となると、どのように広報するのが有効なのか悩みました。

まずは、被服構成学部会のホームページに広報担当の大塚先生が、学生がデザインしてくれた素敵なポスターをアップしてくださいました。一般の中高年への対応は、本学で行われる市川市民講座や大学の公開講座の出席者に対するチラシ配布としました。また本学は博物館や 18 階のラウンジを一般公開しているので、ここにもポスターを貼り、チラシを置きました。さらに、筆者が市川市の市民活動団体支援制度審査委員をしている関係で、市川市役所の企画部市民活動推進担当のホームページに講座の概要と申し込み要領を掲載してもらいました。また、市川市の一般家庭に配布さ

れる民間のタウン誌、市川読売新聞や朝日新聞の地方版にも掲載してもらいました。いずれも無料でした。マスコミへの広報は広報担当の嶋根先生が担当してくださいましたが、本学のファッションショーの広報をなさった経験を生かしてくださいました。また、講座の演者でもありました障害を持つ山本邦昭さんが障害者のネットワークを生かしてあちらこちらに声をかけて下さいました。市川に近い東京都の江戸川区・墨田区・足立区などの高等学校と市川市近郊の高等学校にも案内を送りました。

その結果、部会のホームページからは、北海道や九州の非会員で福祉関係の仕事をしている方からの申し込みがありました。朝日新聞の関東地方版の効果は、市川から遠い茨城県や神奈川県からの申し込みに表れました。その他の広報の方法でも何人かの申し込みがあり、全体で 110 名を超える参加者を集めることができました。内訳は、一般 30%、大学・専門学校教員 52%、高校教員 3%、短大・大学生が 8%、本学助手 7%でした。

公開講座当日は、シンポジウムや展示やワークショップで一般の参加者から質問があがったり、測定や試着体験をする人があつたりで、時間が足りないほどであり、構成学の研究者と一般の人達との交流もできたのではないかと思います。

当日取材に来た朝日新聞の記者が、講座後、障害者の山本さんや泉先生の活動などを全国版で取り上げてくれました。被服構成学の分野での研究や活動内容が公開講座の当日はもちろんのこと、その後も少しずつ世の中に広がったということは大変喜ばしいことであり、広報に多くの時間と神経を注いだ効果があつたと安堵しております。

被服構成学部に期待すること

和洋女子大学 山本 高美

京都女子大学短期大学部 渡邊 敬子

被服構成学部会では、委員の先生方のご努力により、海外・国内研修、夏季セミナー、研究例会、部会誌発行等が行われ、活発に活動している部会であると思われる。

しかし現状は、工業化・IT化により、被服は「作る」から、「買う」ものへと変わっている。また少子化等による原因から、被服系大学に進学する学生の減少は顕著なものがあり、悩ましい限りである。このような現状であっても、衣食住は人間の生きていくための根幹のであり、それらの産業につく学生を教育し、輩出していくことは重要である。

部会に期待する点として、特に新しいとはいえないが、①アパレルメーカーへの見学、縫製工場の見学、縫製機器の見学、②海外研修・国際会議への案内、③他分野の研究者との共同研究、産学共同による製品開発、等が考えられる。被服構成学部会のみではなく、様々な分野の研究者と交流することにより、新たな発見も生まれる可能性がある。

学会によっては、発表者・著者、全員が学会員でなければいけないというような、閉鎖的な学会もある。このようなことは、逆効果であり学会員は減る一方であると思われる。また、論文の書き方は、分野によりかなり違う部分がある。そういう様々な分野の論文であっても、許容できる査読を行うことが求められるものとする。

被服構成学教育の内容は、アパレル業界の進化とともに、変わっていくものであり、広い視野を持つことが重要と考える。そこで、この被服構成学部会がそれらの内容を提供していく場となることを、期待する。

改めて考えてみますと、被服構成学部会では既に多くのことがなされています。例えば、夏季セミナー・海外研修など実に貴重な学びの機会を与えていただきました。また、衣料サイズに関するアンケート調査などは部会というネットワークならではの大きな成果だったと思います。さらに、部会の多くの先生方が関わられた体格調査は社会的意義が大きかったと思います。

しかし、最近の体格調査は計測方法が異なるため比較ができず、企業にとっては以前との差が必要なのに、との苦情も聞きました。また、幼児について公開されているデータの被験者数は多くありません。実際に計測を行ってみると施設間に体格差がみられるなど、対象地域や例数を増やして検討することが必要ではないか考えられますが、一人でこれを行うことは無理です。また、高齢者の計測は十分でしょうか。このように考えますと、信頼性、継続性があるデータを得ることがまだ必要であり、これを有効に利用してもらうためには分析結果を分かりやすい形で提供することが必要と言えます。これができるのは本部会以外には無く、このような公益性の高く専門的な活動が、部会、ひいては被服構成学の存在意義につながると考えます。

これは一つの例にすぎませんが、引き続き教育・研究を通じて日本の衣生活・衣文化に貢献することとともに、産業のニーズを意識し、産業との連携を図ることが、今、大学で被服が生き残るために必要だと思えます。被服構成学部会が、そのネットワークを活かして、企業ではできない規模の組織的・継続的な研究を行う場、その成果を社会に向けて力強く発信していく場となることを期待しています。また、このためにも研究者の養成を急いでほしいと思えます。



被服構成学部会 会則

役員一覽

入会申込書

社団法人日本家政学会被服構成学部会 会則

- 第1条(名称) 本会は、社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条(目的) 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条(事業) 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条(会員) 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条(入会) 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第6条(退会) 会員が退会をしようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。
この場合、既納の会費は返却しない。
- 第7条(役員) 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名
副部会長 2名
運営委員 若干名
監事 2名
- 第8条(役員を選任) 役員を選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長および監事は、運営委員会がこれを推薦し、総会で選任する。
 - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第9条(役員任期) 1 役員任期は2年とし、再任を妨げない。
2 役員再任については、申し合わせを別に定める。
- 第10条(役員職務) 役員職務は次のとおりとする。
- 1 部会長は部会を代表し、会務を統轄する。
 - 2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。
 - 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
 - 4 監事は本会の会計監査を行う。
- 第11条(会計) 本会の会計は次のとおりとする。
- 1 経費は正会員の会費、その他をもってまかなう。
 - 2 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月末日に終了する。

以上

附則

- 1 この会則の改正は、総会の議決による。
- 2 施行に関する内規は別に定めることができる。
- 3 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする。
- 4 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする。
- 5 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする。
- 6 社団法人日本家政学会部会規程に基づき、平成15年8月27日から被服構成学部会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 7 この規約の施行は平成15年8月27日からとする。
- 8 社団法人日本家政学会部会規程に基づき、平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会則とする。
- 9 この会則の施行は平成18年8月22日からとする。

社団法人日本家政学会被服構成学部会 申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成する。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事及び編集幹事
(1) 必要に応じて事務局幹事及び編集幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事及び編集幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事及び編集幹事は役員会に陪席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。

附則

この申し合わせは、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約に基づくもので、改正にあたっては、運営委員会の議を経て、総会で承認する。

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この会則の一部改正の施行は、平成18年3月31日からとする。

平成 20・21 年度役員

部会長	泉 加代子	京都女子大学
副部会長	布施谷節子	和洋女子大学
	岡部 和代	京都女子大学短期大学部
運営委員		
(庶務)	森 由紀	甲南女子大学
	千葉 桂子	福島大学
	川上 梅	東京家政学院大学
(会計)	林 仁美	大阪夕陽丘学園短期大学
	植竹 桃子	東京家政学院短期大学
	服部由美子	福井大学
(企画)	鳴海多恵子	東京学芸大学
	渡部 旬子	文化女子大学
	片瀬眞由美	金城学院大学
	森下あおい	滋賀県立大学
(広報)	大塚美智子	日本女子大学
	鈴木 明子	広島大学大学院
	小田巻淑子	東京田中短期大学
	十一 玲子	神戸女子大学
(編集)	川端 博子	埼玉大学
	別府 美雪	共立女子大学 (非)
	石垣 理子	昭和女子大学
<30周年記念特集号立案>		
	猪又美栄子	昭和女子大学
	雲田 直子	東京家政大学
(監事)	高部 啓子	実践女子大学
	富田 明美	椋山女学園大学

事務局 〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町 35

京都女子大学 家政学部 生活造形学科

TEL 075-531-7166

FAX 075-531-7166

E-mail : izumik@kyoto-wu.ac.jp

(社)日本家政学会被服構成学部会入会申込書

申込年月日	年 月 日	受付年月日	年 月 日
ローマ字			
氏名	氏	名	
西暦 19 年生	性別	男 女 (どちらかを○で囲む)	
家政学会所属支部			
自宅住所	〒(—)		
	TEL		FAX
	E-mailアドレス		
勤務先・職名 及び所在地	勤務先		職名
	〒(—)		
	TEL		FAX
	E-mailアドレス		
専門分野	<研究分野>		
	<担当授業科目>		
最終学歴			
学位			
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)		

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

- ◆ 個人情報保護には十分に注意をいたします。
- ◆ 部会申込書は被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL : <http://h-kohsei.com>

編集後記

今年の編集は、30周年記念号との合体号で大当たりでした。記年号部分は猪又先生、雲田先生および石垣先生、定例部分は大久保先生と私で担当しました。

30年前といえば私は大学生でしたから、はからずも被服構成学成部会の歴史は、私の研究生活の道のりにはほぼ合致することになります。家政学会の60周年記年号の編集に関わっておりますが、10年間の論文(被服関連)は50周年時に比べて減少しており、残念なことです。しかし今回の編集を通して、発足当時から新しい研究を発表され、現在も第一線でご活躍の諸先輩もおられることを知り、そして編集を通じ会員の皆様の協力体制を宝と感じました。部会誌を読まれた方々に、後を継ぐ者、次に渡す者としての新たな自覚をもってもらえたら、編集担当として大きな喜びです。(川端)

30年という年月の感慨は上記のような、また“はや、そんなに!”“自分の年齢と一緒に!”など様々でしょう。しかし部会の歴史を一覧で見ると、多様な企画を時代に合わせ、教育・研究に還元すべく実施してきたことがよくわかります。諸先輩の先生方が築き上げられた被服構成学という分野に携わる人口が減少しつつある今、社会の一隅で光を放つには何をしていかなければならないのか、世代を超えて(とは言ってもこれからの20~30年を見ることができ方たち中心で)考える時ではないでしょうか。つい自分の足下ばかりが目に入りますが、大きく広くそしておおらかに!(雲田・猪又)

平成21年3月31日・発行

発行：(社)日本家政学会 被服構成学部会

印刷：西桜印刷株式会社

TEL：03 - 3568 - 2543